
けんむす

ニエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けんむす

【Zコード】

N4740W

【作者名】

二Hル

【あらすじ】

【でんむす編 1～27】 彼は今日も村で過ごしていました。隣人の男は冒険者になるために、隣人の女は勇者と旅をするために村を出ていきました。ある日、彼に転機が訪れます。

【接続編 28～】 ヒトは天に憧れ、繋がることを夢見ます。

ここはヒノ村。

祖父が拓き、父と母が整えた小さな村。
そんな村で俺は今日も暮らしている。

「右隣のマグが中央に行ってから2週間、特に変化はなかつたな」

畠を耕しながら声をかける。

流れる汗をついでに拭う。

「君の友達が減ろうとも、畠仕事は減らないからね」

返事をするのはイコ。

俺の可愛い家族である。

「左隣のアルが勇者にホレて一緒に行つてしまつた

朗らかな陽の光を浴びながら丸くなつてゐるイコがちらりと俺を見る。
尻尾がゆっくりと左右に揺れる。

「小さい頃に君と結婚の約束をしていたのにね」

「ああ、人生はなんと儂いのだろうか。

演技掛かった啖きはそんなものだとイコに切り捨てられた。

「勇者とか死ねばいいのに」

「あまり大っぴらに言うものじゃないよ 不敬罪で縛り首なんてなつたら目もあてられないよ」

父の形見の剣を持つて行つた今はいない勇者に文句を言つ。いないのでから文句が言えるのだけれど。

「腕に自信のあつたマグは一流の冒險者を目指して中央へ 村一番の美女だつたアルは勇者のお供」

「その友人だつた君は畠を耕す、と」

「切ない話だ。

人生つて本当に切ない。

「マグのギフトなら成功するかもしれないな 探索者として名前を得るかもしれない」

「アルは器量が良かつたからね 勇者と結婚するかもしれないよ」

友人たちが妬ましい。

怨みで人が殺せたらと思えるほどだ。

「ああ、妬ましい」

「なら一緒にけばよかつたじゃないか」

一緒に行つても死ぬだけだとわかつてゐるのに行くわけないだらう。
マグのよつな実用的なギフトが羨ましい。

「マグは加速のギフト持ち、俺のギフトは迷宮じゅ役立たず」

「ギフトが微妙なアルでも勇者にホレ付いて行つたけどね」

勇者のお供つてなんだよ。

俺は生きる」とこ主を置いているのだ。

「本當に恐々として 世界滅びる」

「國が世界のために勇者を呼んだのに眞っ向直撃つてどうなんだう
うな」

正義の勇者とか冒睡す。あ。

どうせ他國への牽制のためだらう。

「世界のためなら税を減らせ 舞いじを樂こじ」

「此は國の財産だから、どうせひとつとも血田なのが」

シレッと壇に切るイコを見るも田線はどうへやら。
鈴を思わせる澄んだ少女の声なので腹も立たない。

「財産の管理くらうひやんと行つて欲しこな」

「金銀財宝の前では小銭なんて飾りこすらならないのや」

世知辛い。

この世に救いはないのだろうか。

「生きるつてなんだろうな」

「なんだろうね」

イコには尻尾が九つある。

月の様に静かに輝く銀色の毛がとても綺麗なキツネである。

「……幸せってなんだろうな」

「君の『ご飯が食べられる』ことかな」

イコはときどき人間の少女の姿になる。

キツネの耳と九つの尻尾が生えている彼女はとても綺麗である。

「……恥ずかしいやつだな」

「君は難しいやつだね」

楽しそうに笑うイコを見ると何も言えなくなる。
俺の可愛い家族である。

晴れた空の下、今日も畠仕事。

変わらないからこそ、日常なのである。

「マグから手紙が届いたぞ」

俺の右手には古ぼけた紙切れ。
友人であるマグからの手紙である。

「へえ、それは良かったね」

イロは今日も丸くなっている。
ふわふわの尻尾を触りたくなるが我慢する。

「冒険者になつたから迷宮に挑戦している、だつてよ」

「順調なことはない」とね」

迷宮には危険と宝が眠っている。

出入口を国が管理し、探索は冒険者や騎士が行つてこるとか。

ダンジョン

「一攫千金か 夢のよつな話だな」

「夢は叶わないのさ」

夢は見るモノってことだろ？

俺のギフトが探索向けだつたらどうなつていただろ？

「アルからも手紙がきてた」

「あまり良い予感がしないね」

白い上質紙に真っ黒のインク。

手紙だつて無料ではないのだが、勇者の余裕が見て取れる。

「要約すると『勇者カツコいけどモテる 結婚したい』だつてよ」

「なんといつか、アルつて頭がおかしいよね」

否定はしない。

結婚の約束をしてきたときは畠の真ん中だつたし。

「お金に余裕がないから返事を書けないけどな」

「村人の限界だね」

マグですら手紙を書く余裕があるというのに。
ファーストジョブが村人は伊達じやない。

「今日も汗水たらして働いて、薬草を栽培しても税として持つて行
かれて、売つても二束三文」

「世知辛いね」

魔物に襲われても、盗賊に襲われても、戦争があつて兵士に略奪さ
れても運が悪かつたとして諦める。

村人が成り上がるには奇跡が起きなければならぬのだ。

「何事も努力すれば成せるわけでも無し」

「現状打破のために冒険者になるのも間違いではないけどね」

ギフトで上級の冒険者になれるかもしないし、偶然組んだ仲間が凄く強くなるかもしないし、奇跡が起きてなんらかで成功するかも知れないし。

冒険者も多分に運が絡んでいるモノだ。

「富、名声、権力 縁遠すぎてなんだかわからん

「村を離れて一緒に行けばよかつたじゃないか 誘われていたらう」

イコの揺れる尻尾を見つめながら思い出す。

行商人とともに村を出たマグに一度だけ誘われたが断つたことを。

「俺が村を出るわけないだろ」

「そうだね 滅ぶ結果は目に見えているよ

祖父に頼まれた。

父と母に頼まれた。

「出で行かないのは俺の意思だ」

「でも羨ましいんでしょ」

村人がいなくなるまで。
村の皆を見守るように。」

「羨ましいのは本当だ」

「なら行けばよかつたのに」

祖父との約束。
父と母との約束。

「これだけは破るわけにはいかない」

「……」

だから俺はここにいる。
約束を守るために。

「イコは好きにしていいんだが」

「好き」とじてゐるからこゐんだよ」

ああ、ここつは恥ずかしいやつだつたんだ。
顔が赤くなつたのを隠すためにそつぽを向く。

「……ならここナビな」

「うそ、いいんだよ」

笑い声が聞こえる。

ホントに恥ずかしいやつである。

「まあ、実際についていつても野垂れ死ぬだけだしな」

「カツ」「悪いね」

自分でも承知しているが改めて言われたくはないのだ。
「つむじこじやつである。」

燐々と輝く太陽。
鱗割れた大地。
乾燥した空気。

「雨が降らんな」

「そうだね さすがのボクも困っちゃうね」

銀色の綺麗な毛並みのイコだが、日の光を反射して眩しい。
弱々しくへばつているのは暑さに苦手だからだ。

「」のままだと薬草も枯れてしまひ

「大変だね」

そう、大変なのだ。
だからといって解決策があるわけでもない。

「井戸も余裕がないだろ？」

「やうだね　」」」最近、ずっと晴れてるもんね

困ったものだ。

いつもならこの時期は降るはずなのだが。

「魔法で雨を降らせたりできないのか」

「そんな魔法は使えないよ 燃やすなら簡単だけど カラカラだからよく燃えるよ」

イ「は魔法が使える。

火系統しか使えないのが玉に瑕だらうか。

「魔法も万能じゃないな」

「人間だと学問の一種として捉えているし、簡単なものではないんだよ」

魔法なんてよくわからんが、一筋縄ではいかないらしい。
勇者とか魔人などは魔力に物を言わせて結果を呼び寄せるとかできるらしい。

「魔法に夢を見るのはやめるか」

「夢は叶わないからね」

「どうやら現実は厳しいようだ。」

「俺からしたら魔法が現実的ってよくわからんが。」

「このまま雨が降らなかつたら今年の税が払えなくなるぞ」

「人間は大変なんだね」

「フォックスタイルのお嬢さんには関係ないのだろうか。
いや、俺の家族なんだから関係あるに決まっています。」

「余裕ぶつこいでいるイコは気付いてないだろうが、極論としてご
飯がまずくなる」

「大問題じゃないか」

危機に気付いたイコは顔色を変えるも暑さにへばつて結局横になつ

たままである。

獣型は毛皮により体温上昇、人型になつても耳と尻尾が暑いという
どつちつかず。

「雨が降ればかなり助かるんだが」

「何か燃やして煙で雲を作るとか聞いたよ」

父に聞いたのだろう。

この澄み渡つた青空の下では効果無しに違ひないので却下。

「どつしたものか」

「どつしようね」

村人がまた減つた。

中央のようによここよりも条件のいい場所を探しに出たのだろう。

「ほぼ全員が死ぬだろうな」

「魔物がいる森を抜けるのは大変だからね 新天地探しといつより
は死地を求めている様にしか思えないよ」

力のないモノに世界は優しくないのだ。
希望もなく死ぬのだろう。

「村から出て死んだら俺には関係ないからいいけどな

「君は村に縛られてるだけだもんね ここは安全なのに出ていくのは
はなんでだろう」

ただの村人だつた人間が外に出たら魔物に襲われて終わりである。
ここら辺の魔物のランクは知らないが、襲われたら絶望的なのは間
違いない。

「夢みてるんだろ しかし雨が降らんな

「夢つて凄いね ホントに雨が降らないね ボクもそろそろ限界だ
よ

垂れた尻尾がイコの限界を知らせてくれる。
情けなさも漂つてくる。

「ああ、そういうえば隣村も被害が大きいらしい

「だらうづね」

暑さにへばつたイコを抱えて家に戻る。
こんなでも俺の可愛い家族だからだ。

枯れた大地。
渴いた作物。
たれたイコ。

「マグから手紙がきた 順調に探索が進んで、迷宮でエルフの美女を助けて仲間にしたらしい」

「そりなんだ ボクが苦しんでいるのにいい身分だね」

暑さでイラついているらしい。

戦争になつたらすぐに駆り出される冒険者がいい身分なのは当たり前と思うべきなのだろうか。

「そりカリカリするなよ マグも頑張ってるんだから、多分」

「他人の努力とかそんな紙きれ一枚とかよりも水が欲しいよ……」

行商人が届けてくれたのだが、村の状態を把握していたのか高い値段で水を売つっていた。

商売だから仕方ないのかもしれないが、買うには厳しいので諦めた。

「悪いな 買うてしては高すぎても手が出せない」

「わかつているよ 我慢するから大丈夫」

イコには悪いが諦めてもらおう。

左隣は家には水がたくさんあるらしい。

「アルが勇者のパーティにいるから懇意にしてもらおう」とだ
らう

「村は次いでつてわけだね ああ、忌々しいよ」

同意ではあるがアルがいなかつたら行商人が来なかつたかもしれない
ので何とも言えないわけだ。

来ても来なくても変わらないよな気がするけど。

「そのアルから手紙がきた」

「いい紙を使つていてるね ホントに恐々しい」

書いてあることが脳天氣すぎる。
俺を煽つてゐるに違ひない。

「内容は惣氣話とモテモテ勇者にホレたライバルたちとの争いの話
だ」

「アハだね」

もつたひないゴミだ。

どうにかして汚れを消せないだろつか。

「しかし、勇者も凄いよな 別の世界つてやつから呼ばれて魔王を
倒すつて凄くね？」

「見ず知らずの国のために命がけつてお人よしを軽く超えてるよね」

国がヤバいんで助けてくださいっていきなり呼ばれて助けるつてど
んな精神しているのだろうか。

隣村ですら急だつたら断る俺にはわからない。

「ああ、でもモテモテでいいモノ食つて何しても自由なんだっけ」

「そんな感じの特権もあるけど国の財産だから命令が下つたら従つ
必要があるね 命令は兵器としての役割がほとんど」

「一時の贅沢のために命差し出すのは無理だな。
憎いけど勇者すぐえな。

「その勇者に命を狙われる魔王ってどんなやつだつな どうじ
るかすら知らないんだけど」

「魔王なんて理由付けのためにいふようなものだからね」

隣の国で欲しいモノがあつたら勇者を送り込んで魔王討伐のためつ
て名義で占拠することもあるとか。
ああ、だから勇者を召喚するのか。

「かなり醜い理由だつたな、魔王討伐 大義名分つてやつだい」

「うふ、権力を得ると魔王の便利さがわかるらしけどね」

一生俺には縁のない話だつ。
権力云々の前に水がない。

「魔王でもいいから水をくれって感じだな」

「貴族が聞いたたら禁固刑だよ」

貴族なんて見たことないから畏れようがない。

魔王討伐よりも水くれ。

「居もしない魔王を討伐って勇者が滑稽だな」

「一応こりよ 今は迷宮の最下層で眠つてこりぬナビ」

魔王はこりぬナビ。

勇者に追われていてるのに眠つていてると余裕過ぎだろ。

「そのまま勇者も迷宮に突撃してくれればこりこのにな

「勇者には知らされてなかつたり、國も知らなかつたりといろいろあるんだううね 風漬しに探してて感じだし」

なぜイコが魔王の居場所を知つてているかが気になるが俺には関係ないから聞かないでおく。

魔王を追つててるのに國の利権のために働くつて勇者も嫌な職だな。

「魔王もわざわざ魔王を追わずに血虫にすねばこそのこと やれくれ
い余裕だろ」

「魔王を倒すと元の世界に帰る事ができぬって言われてるからね
従つてしまふ」

なかなか国もやめないとあべだし。
まあ、許さないけど。

「魔王も世知辛いな」

「何にでも戻ること」と悪ことじがおるもんだよ」

じゃあ、今のこの生活にもこことじがあるのか。
……平和なことへりこいか。

「でも悪ことじの方が多いな」

「良じことじはボクと一緒にいられる」とつていつて欲しかつたな

わすが恥ずかしいやつだ。

にこにこしながら言ひとせ反照である。

「それせどくな」とをしてもだら 今の生活に限つた恥じや
ない」

「ああ、やつか」

暑さでくぜつていたクセに今は上機嫌で尻尾を揺らしこる。
恥ずかしいけど可愛いやつである。

降りしめる雨。

恵みの雨つゝもつてある。

「久しぶりの雨だな」

「こべらか涼しくなつてくれてボクも嬉しいよ」

窓から外を眺めているイロは機嫌がいい。

暑いのが苦手な彼女は家でのんびりしているのが好きなのだ。

「やうか まあ、薬草も枯れなかつし俺としても嬉しい限りだ」

「薬草が枯れると雑草にすりかかるからね」

今はすぐに傷が治るポーションがあるから薬草もそこまで重要ではないのだ。

そのうち薬草が市場から消えるかもしれないのに雑草と霸権を争うこと……ならないな。

「中央への移住を決めた人が増えてきたようだ」

「ここも年々住みにくくなってきたからね」

魔物の生息域をくり抜いたように作った村である。

外部から人が訪れることはほとんどなく、来るのは傷だらけの旅人や冒険者を雇つた行商人などの奇特な人たちだけだ。

「あの商人もこんな薬草を買いにこんな辺鄙な場所に来るとか凄いよな」

「国もわざわざ税として取りに来るんだもんね」

不思議な人々だ。

泡銭にしかならない薬草を買うためにここまで来るのだから。

「味が好きとか?」

「ただの雑草と変わらないでしょ」

雑草と同じだと言われるのは悲しいが否定はできない。

磨り潰した薬草の汁をアンデッドモンスターにかけると即死するか

「でも戦つてゐる最中に薬草つてどうゆうね」

「薬草をもしゃもしゃしながら戦つ歴戦の勇者とかカツコがつかないね」

右手に聖剣、左手に薬草で魔王と熱く戦うとか子供の夢が壊れる。ポーションはかけるだけって聞くから偉大だよな。

「いや、もしかしたら磨り潰した薬草の汁をかけるとか」

「特にアンテッヂに効くけど魔物にも効くから魔王にも効くかもね」

互いに薬草の汁塗れで戦う最終決戦。

カツコ悪いし、薬草の青臭さが涙を誘つ。

「ポーションはすぐえな 見た目もカツコいい」

「戦いのための薬つて感じがするもんね 『薬草』だと田舎つぽいけど、『ポーション』だと都会っぽい」

傷に薬草使うよりもポーション使った方がオシャレだよな。
様式美的な意味もあるのかもしね。

「まあ、俺みたいな村人は薬草で我慢するしかないけどな」

「薬草の汁つてカツコ悪いよね」

イコの磁きを無視して薬草を煮詰める。
見た目は金色の汁なので悪くないと思つたのだが。

「雨の時の内職だ 仕方ないだろ?」

「いいけどね ちなみに普通の薬草つて緑色なの知つてた?」

……え?

金色じゃないのか?

止まない雨。

湿気がべたべたでイコの毛がもさもさである。
毛繕いが大変だ。

「マグから手紙が届いた」

「また？」

定期的に届くこの手紙。

イコはうそせりしている様子だ。

「また、だ返事もしていないのにな」

「友情つてやつかもね」

ホントのところはどうなのだろうか。
俺にはわからない。

「内容は『パーティが女性ばかり 探索は順調 だとよ ハーレム

を知らせられても困るんだがな

「そつちの様子はどうだ? みたいなことが書いてあったのに完全に今は無くなつたね」

自分の近況を書いてるだけになつた手紙を見ながらマグを思い出す。
……どんな顔をしてただろうか。

「マグハ どんなやつだっけ」

「忘れたとか?」

ジト田で見られても覚えていないのだから仕方ない。
とにかくそんなに仲が良かつただろうか。

「正直、あんまり覚えてない」

「ボクもおぼえてないけどね」

イコも覚えていないらしい。

常に俺と一緒に行動しているイコが覚えていないのだからそんなに仲がいいってわけでもないのだろうか。

「でも手紙が来るしなあ」

「マグの友達が少ないとか」

友達がないから面識がある俺が繰り上げで親友ポジションになつたとか。

ああ、可哀相なやつなんだな」

「順調に迷宮を進んでいる相手に詰つ言葉とは思えないね」

確かにな。

俺なんてただの村人だし。

「心なしか良質の紙を使つてゐるし」

「ホントに順調なんだろ？ うね」

そういうことは羨ましい。

あとギフトが加速とかも羨ましい。

「そしてまた紙が届けられたわけです

「無料で上質紙を送ってくれるなんていい人もいるよね

「欠点は紙の片側に黒い染みがある」とだろうか。

適当にしみ抜きして乾かせば使えるようになるはずだしこれくらいは我慢しよう。

「ホントにな まあ、今は紙の使い道がないがそのついでついで
なるだろ?」

「どうせならインクも送ってくれればいいのにね

全くだ。

まあ、無料なので文句を言つのはお門違いだろ?。

「隣村の川が氾濫するかも知れないとか

「川の近くなんだし、当たり前といえば当たり前だね

隣村、と表現しているがこの村よりもかなり遠い。

魔物の生息域のど真ん中にあるこの村と違つて、ぎつぎり人間の生活圏にあるからだ。

「まあ、凄い雨だからな」

「せうだね そろそろ川ができるかもね」

大雨の後は空に川が出来るのだ。

雲と同じ高さに現れる川なので泳ぐことはできない。

「こつも思つんだがあの川つてどこへ流れてるんだ?」

「あれは七国を中心まで流れてるんだよ 他の国からも同じよつて
流れてるけどここからじやわからないね 川にはアルファアが漂つて
いるから泳げばすぐに見つけられるかも」

この村があるのは外周と呼ばれる魔物の生息域である。

外周のさらに外側から魔力が吹き出し、魔力流として空を流れ、一
か所に降り注いでいるのだとか。

「アルファア?」

「空を漂っている国や」

七国は勇者を召喚できる主な国を指していく、歪な円を描くようになっていたが今は違うらしい。

アルファアというのは七国の中心にあつた国で今は飛び立ててしまつたので七国は円環の状態になり、その中央へ魔力が流れていて雨が降ると川ができるのだとか。

「壮大な話だな」

「ボクたちには関係ないことを」

確かに村人には関係のないことである。ちなみにアルファアが空にあるので地上には勇者が召喚できる国が六つしかないとか。

「俺らに関係あるのは夕飯をどうじよつかつてことだ」

「今日はシチューが食べたいね」

イコは色々なことを知っている。

見た目も昔から変わらない見惚れるよつた可愛い少女の姿のまま。

「今日はやつするか」

「ホント？ 嬉しいな」

そんなイコは食べることが大好きだ。
そして俺はそんなイコが大好きなのだ。

雨である。

しかも大雨。

雨が降らないと文句を言つたのが懐かしいほどに雨が降つてゐる。

「隣村が大雨でヤバいらしく」

「そんなことを前にも言つてたよね 確かに大雨が続いてたら大変だもん」

村人総出で移住するとか。
宛てはあるのだろうか。

「失敗するだらうな

「するだらうね」

老人や女子供は大変だらう。

その決断を選ばざるを得ないといふまで追い詰められたってことか。

「ここまで来るつもりだらうか」

「ここまで来れるわけないよ 外周はとても危険なんだ」

「でもないと思つがとても危険な場所らしい。
ここは外周の中でも比較的安全に違いない。」

「中央を田指す若い衆もいるとか」

「労働力や防衛力が更に減るんだ ほとんどが死ぬだらうね」

「俺もそう思つ。」

「魔物も出るだらうし、盗賊だつて蔓延つてゐるし、家財だつて運ば
なけばならない。」

「命を賭けた戦いだな」

「人生に一度くらいはあるだらうね」

「命を賭けることなんて一度でも多いと思つ。
そんな機会、できれば一生会いたくない。」

「移住と言えば左右の家が中央に移るんだとさ」

「」こんな大雨の中を？」

普通は正氣が疑うところである。
さつきまで話していたことも相俟つて。

「竜籠で行くんだとよ」

「竜か それは凄いね」

竜というのは魔物の上位種らしい。

外周でも絶対に安全、といえるわけではないが徒歩や馬車よりも安全なのだとか。

「遠い世界だな」

「さうだね 龍なら簡単に見つけられるけどね

龍、それは魔物の頂点。

魔力流に住んでいる最強の種族らしい。

「竜とは違つのか」

「竜は魔物が進化した姿で龍として生まれた存在だからね 格
が違つよ」

竜がせりに頑張って進化すれば龍に届くかもしれないらしい。
薬草とポーションの関係みたいなものだらうか。

「ふうん」

「興味ないつて顔だね まあ、いいんぢゃないかな」

イロが嬉しそうに微笑んでくる。

「……そなものだらうか」

「……そなものだらうか？」

「いや、なんでもないことイロに伝える。

俺に女心を理解することは一生かかっても無理だろつと呟て言われたし、実際そうなのだろつ。

「今日の」飯はどうするか

「バカ勇者が保存食を持ってちやつたからね

保存の効くモノを持つて行くとかホントにやつてくれる。

食べ物と思い出を同時に奪うとか悪魔の権化としか思えない。

「不敬罪とかじゃないのか」

「誰も気にしないよ みんなそう思つてゐるもん」

村中の家から物を勝手に持つて行つたけど、あんなにも沢山の物をどこに入れたのだろうか。

わざわざ危険らしく外周まで来て家探しとは勇者もツワモノだ。

「すまんな

「君に謝つて欲しくて言つたんじゃないんだけどな」

困ったように笑っている。

俺が謝れば「はすぐに文句を言わなくなる。」

「まあ、薬草の汁はたんまりあるから」

「それはどうでもよかつたり なんで赤くなってるの?」

俺は文句を言つて いる姿よりも笑つて いる姿を見たい のだ。
ちょっと恥ずかしいけれど。

「いいや、なんでもない」

「アハ?」

いつまで続くのだろうか、この雨は。

「口は雨が好きらしい。」

なぜだろうか。

「マグさんからお便りです」

「え、また？」

「そう、『また』である。」

竜籠でついでに持ってきたらしい。

「尊話とか聞けるから俺としては都合いいんだが」

「竜使いの人からでしょ 手紙が完全についでって感じだね」

否定はできない。

自慢話しか書かれていない手紙に意味は無いからだ。

「内容もあまり変化なし 個人とギルドのランクが順調に上がっていることとか女性の嫉妬に板挟みとかの話しかない」

「ホントに順調なんだね 竜籠を呼べるって凄いよ」

「そういうえば凄いのかもしれない。俺には関係ないのだが。

「俺になんらかの利益があるんなら諸手を挙げて応援するけどな」

「期待の探索者の直筆の手紙として売るとか」

「売れるのだろうか。

ちなみに探索者とは冒険者の中でも迷宮の探索に重きを置いている人のことだ。

「また無料の紙が届いたわけだ」

「毎度のことだけど嬉しいね いい紙だし」

「輝くような白さとはこのことだろ。」

「凄くいい紙ではあるのだがラクガキがあるのが欠点だ。」

「ラクガキはやめてほしいだろ、常識的に考えて」

「贅沢なラクガキだよね」

洗濯するときに使う薬草を溶いた水で洗うと紙が綺麗になることに気付いた。

紙がふやけてしまつので改良の余地があるけれど。

「隣の家が移住したのを見て危機感を募らせたのか、ここに村人も総出で引っ越してしまった」

「仕方ないよ 止まない雨と竜籠なんて見たら世界の終わりっぽいもん」

確かにどこなく世纪末っぽさを感じる。

恐怖に駆られて逃げるのも頷けるといつものだ。

「みんなどこへ行くんだろうな」

「どこにも行けないと思つよ 外周から抜けられるはずないもの」

やはり魔物は脅威なのだろう。

ここに辺の魔物はあまり強くないのだが数が多いとかそんな感じだろうか。

「村としては終わりだな 廃村決定に違いない」

「余裕で大丈夫だよ 村長の君がいて、村人のボクがいる どこからどう見ても村でしょ？」

どう見てもごつこ遊びです。

家や畠が無かつたら可哀相な人たちに分別されてしまう。

「まあ、いいか 祖父が拓いて、父と母が整え、俺が潰すとか避けたいからな」

「うん、いいと思うよ というか中央に行くつて発想はないのかな？」

イコが村を続けられるつて言つたから乗つたのだが。
中央に行く気は無い。

「今のところは全くないな それとも村は嫌か？」

「ボクは大歓迎だよ 煩わしいモノが無いって素晴らしい」

「イ」は人間に合わせるのが苦手なのだ。
このほうが楽なのがもしけない。

「機会があつたらそのうち中央へ行くのもいいかもな」

「そうだね いつになるかはわからないけど、それも楽しいかもね」

「俺は村長である。
セカンドジョブ・村長とか着実に昇進している。」

魔法といつのは実に凄い。

現実的といコが言つていたが、俺からしたら魔法は夢のよつなものだ。

「雨降りすぎだろ

「こんなに降つてたことってあつたっけ

俺の記憶には無い。

記録的な大雨のはずだ。

「しかし魔法つて凄いな」

「ボクの魔法は暑いときには役に立たないけど雨とか寒さには便利だからね」

雨で畑がぐずぐずにならないように火球で畑を乾かしている。一家に一人はイコがいれば雨季の畑仕事も大助かりである。

「村全体を乾かしたりとかできないのか」

「村が全焼してもいいのならすぐ出來るよ」

やはり都合よくはいかないらしい。

乾かすために全焼とかリスクがでかすぎる。

「税の徵収がきたんだがな」

「そりいえば来てたね、この雨の中 ここ いつ外周だから凄いと思うよ、人間の欲つて無限大だね」

雨だから魔物も活動を控えていていつもよりは楽だったらしい。
村の状態を見て周つっていた。

「廃村決定だとさ 国から切り捨てるので自由にしていいって言わ
れてしまった」

「どうしようもないって感じだもんね どうどう独立したって言わ
かな」

国公認で独立した村とかここだけかもしれない。
もしかしたら俺は村長といつ名の王……無いな。

「独立といふか捨てられただけだな 今までと変わらないだろ」

「税を取られないとか、廢村認定だから人が来なくなるとか色々あるけどね」

商人が来なくなるのは困る。

そのうち買い出しに出なければならないだろ？

「薬草を収穫したら売りに中央まで行つてみるか」

「いいかもしれないね 中央を見てみるのも面白いかも」

「薬草の収穫まではまだかかるのだ。

じつくりと時間をかけても文句を言つ人はいない。

「イコは俺を否定しないから独裁者になりそつだ」

「それも面白いかもね 望むならボクを好きにしてもいいよ」

にいたるところながら「言つ」とではない」と思ひ。

毒気が抜かれてしまつた。

「あー、まあ、やのうぢな」

「そのうちじっくりれるんだね
楽しみだな

もうなんども並ひがいい。
恥ずかしいやつね。

ここはヒノ村。

祖父が拓き、父と母が整え、俺が治める小さな村。
そんな村で俺たちは今日も暮らしている。

「マグから手紙がきた」

雨を眺めているイコに声をかける。

彼女は雨が好きなのだ。

「未だに届けるつてす」「こよね

アルという阿婆擦れと一緒に届けているから大丈夫とかなんとか。
それでも手紙を届けるだけに竜籠つてバカだろつ。

「依頼で強い魔物を倒したらじい

「探索者がクエスト解決とは珍しいね　迷宮を探索するのが目的な
の」

迷宮で知り合った女の子に頼まれた依頼でわざわざ中央から出て解決したらしい。

女絡みの話ばかりだが女運が悪いのだろうか、それとも良いのだろうか。

「討伐したのは湖に住む『スキュレイ』って魔物らしい 外での戦闘は迷宮と違つて大変だったとか」

「スキュレイを討伐とは驚いた マグたちは気付いてないのかもしないけどスキュレイは下級の竜だよ 迷宮に入つて数か月の人間が勝つには厳しいレベルだと思ったけれど」

スキュレイは水辺を好んで生活し、竜種としては戦闘力が低いが魔物の中ではかなり強い。

水属性の魔法操る水の存在するフィールドだと強さに補正がかかるのだとか。

「凄いことなのが」

「下級に分類されても竜は竜だからね」

竜は魔物が進化した姿だと言つていたし、魔魚とか半魚人から進化したのかもしれない。

魔魚からの進化だとしたら陸上に揚げられてぴちぴちしている竜と

いうカツ「悪い姿を想像してしまつた。

「竜にもさまざまな種類がいるんだな 人種みたいなモノか」

「種類がたくさんいるのは元の魔物が違うから 成長を続ければ最終的には全てが亜龍になるから人種とはちょっと異なるかもね」

竜も頑張れば亜龍という龍になるってことらしい。

龍という存在はそれだけ隔絶した力を持つているってことなのだろうか。

「つまり竜は料理的なモノか 最初は別々の材料だが最終的には一つの料理になる、みたいな」

「ふふ、そんな感じかもしないね ヒトも英雄になれるから大きく見れば竜と同じかもしないね」

人間と亜人を一括りにしてヒトと表現するらしいが分類の方法は聞かなかつた。

ヒトでは成し得ないであろう奇跡を起こした唯一に送られる称号が英雄だとイコは説明してくれた。

「称号とかじいさんが死んだときに得た『ヒノの後継者』しか持つ

てないな

「十分だと思うけどね 他に欲しいなら手伝ひつけど？」

欲しくないので手伝わなくていいです。

称号の取得条件は多岐に渡るが、根本は仕様をこなせばいいらしい。

「興味ないな」

「言つと思つたよ ああ、でもスキュレイを倒したなら呪いが大変だね」

確かに手紙には呪いをかけられたと書かれているが今のところマグやパーティに被害は無いらしい。

警戒していくも仕方ないので近いうちに迷宮の探索に戻ることも書かれている。

「影響はないらしいぞ呪いも失敗したんじゃないのか？」

「いいや、成功しているね 雨が降り続いているのが証拠だよ」

スキュレイの呪いは雨が降り続くことである。自らを殺した者の魔力を追つて、大雨ですべてを憎悪の続く限り洗

い流す。

「なるほど」の大雨はマグのせいか

「マグの家がある」ことは魔力が残っているから雨が降っているんだ
ろうね 隣村にも何か彼が身に着けていたモノがあるんじゃないかな

この分だとマグが訪れた場所のほとんどは大雨に違いない。
中央は国を中心だから大雨でも気にするほどの被害は受けないのだ
らう。

「どのくらい降り続くんだ？」

「わからないけどまだまだ続くと思つよ 竜の呪いだし、ひと用じ
や効かないかもね」

このままでは村が水没するか、薬草が腐るかしてしまつ。
引っ越しして空き家状態なのでなくなつても構わないだらう。

「隣の家を燃やすか そしたら魔力云々じゃなくなるだろ」

「いい案だと思うよ ボクが魔力を分解してもいいけど家一軒分を隅々まで触るのは大変だから」

燃やし尽くすことが決定した。

普通に燃やすよりイコの炎のほうが灰などにも魔力で上書きできるから効果的だとか。

「見事に消し炭になつたな ここに家があつたなんて誰も気づかな
い」

「スキュレイの呪いはおそろしいね」

これが呪いの目的だとしたら確かにおそろしい。
灰が積もつているマグの家の跡地でスキュレイを相手にする恐ろしさを学んだ。

「そついえばマグの手紙も魔力が籠つてるよな」

「その程度ならボクが分解しておくよ」

簡単な物はイコがギフトで魔力を分解してくれました。
可愛い家族は俺が出来ないことを平然とやってのけるのだ。

マグの家、焼失。

止まない雨。

染み抜き。

「こうやって薬草の煮汁を使えば紙が金色になるから高級感も増す
わけだ。汚れも誤魔化せるから高級紙として使えるかもしね」

「……君は何をやつてこるんだろうね 中央の宫廷魔導師が見たら
氣絶するに違いないよ」

薬草の煮汁で紙を洗うのはいけないことなのだから。

薬液塗布禁止令……は絶対に無いな。

「呆れられる理由がわからないんだが」

「世間知らずつて罪だなあと思つてね」

「……はいつもと変わらずしている。
バカにしているのかと思つて言葉を言つてくるが、表情は楽しそうだ。

「村以外だと周りの森しか見たこと無い俺はどうせ世間知らずだよ」

「ああ、機嫌を損ねちゃったかな ボクに聞いてくれたら教えるから気にしなくてもいいのに」

「俺が不貞腐れても変わらずにここにこじてこりのだ。」

「彼女にとつては面白ことなのだらう。」

「事前にいろいろと教えてくれよ そしたら俺も覚えるから」

「君は知らなうことが多くて、教えるのも大変なのさ それに先に教えてしまってボクがつまらなによ」

「始めてみるモノに驚く俺を見たいらしく。意地の悪いやつである。」

「いや、それでもだな……」

「それにね、頼られるつて嬉しいことなんだよ?」

金色に輝く瞳に真っ直ぐ見つめられると、恥ずかしくなる。

「は恥ずかしいやつなのだ。

「教えてくれって頼んでいるのだけれど、

「ボクは説明が苦手なのさ 本物を見ればいいのに説明するなんて無駄な事はしたくないからね」

「どうやら教えてくれないようだ。

実際に中央に行つたらいろいろと教えてもらひになるとなるだらう。

「ところで薬草を……大きな音と揺れだな」

「左隣の家のほうからだね 見てよ」

阿婆擦れの家から音がした。

雨が降つているところに迷惑なやつである。

「俺の家に落すてこなくて良かつた」

「そうだね この巨体だと家なんて簡単に潰されるから運がよかつたのかもしれないよ」

住人がいない家で良かつた。

建っていた家は巨大な魔物に潰されて見るも無残な状態だ。

「初めて見る魔物だな」

「そうだろうね 龍なんてモノは地上で滅多に見れるもんじゃないよ」

この巨大な魔物は龍らしい。

膨大な魔力は立っているだけでも吹き飛ばされそうだ。

「至る所に剣が刺さっていて、深い傷も負っている 羽根なんて片方もぎ取られているし 今にも死にそうだがどうなんだ」

「瀕死だらうと注意したほうがいいよ できれば勇者以上の称号持ちが対応すべきなんだろうけどね」

勇者はすでに中央にいる。

「ついいつときに命を張るのが勇者だらう。」

「国が呼んだ勇者様は物品と人手の補給を行い旅立つたとか間が悪い」

「どうせなら龍の命を盗んでいつてほしかつたね」

身の上を明かさずにふらりと立ち寄った旅人を村人は優しく家に泊め、その旅人は旅立つときに入知れず災厄を呼び寄せる龍を倒し、村人が追いかけてお礼を渡そうとしても一宿一飯の恩義だと言つて立ち去る……そして数か月後に気付くのだ、旅人は勇者だったことに。

みたいなことがあつたら間違いなく惚れる。

「無いな 夢すら見れないとか現実は厳しい」

「勇者だつて人間だからね 人間に理想を抱くのは愚かな事さ」

根元は普通の人間と同じなのだから、どれだけ神格化しようとも性質は変わらない。

イコはそう言いたいのだろうか。

「居座られても困る 暴れられても困る 面倒だが討伐するか」

「国からの依頼だつたら富も名声も権力も一度に手に入る出来事なのに 人知れず終わる龍殺しとか前代未聞だね」

放つといても死にそうだから放置しようかと相談したが却下された。自暴自棄になつてプレスを撒き散らされたら村がホントに滅んでしまつりしい。

「俺がやるからイ」は後ろで応援な

「おや、手伝わなくともいいのかな」

村長の力を試してみたいのだ。
村を守る村長は無敵に違いない。

「村長は村と村人を守るのぞ」

「うんうん、応援してるから頑張つてね でも弱いのが来たら助け
るからね」

イコがにこにこしながら後ろに下がる。

村人だらうと村長だらうと運次第なのには違いが無い。

「まあ、運次第だな そういうのは神様に祈つてくれよ」

「ボクが神に祈るなんて、君のため以外は有り得ないんだからね」

「イ」は祈らなくてもいいのだけれどそれでも祈つてくれるのになんとなく嬉しい。

出来れば神様クラスの仕様を引き寄せたいところである。

「『雨妖精・プウカ』が憑いたわけで」

「ボクの祈りを無視した神は滅んだほうがいいよ」

すごくイイ笑顔で危ないことを呴く「イ」を無視して龍に向かう。妖精で龍に勝てるのだろうか。

「妖精ステに降雨補正も入るがどうだろ?」

「弱ってるし大丈夫だと思つよ……多分」

「イ」も推してくれてるし大丈夫だろ?、多分。とりあえず薬草の煮汁を使えば死ぬことはない。

「もつとカツ」よくて使い勝手のいいギフトが良かつた

「贅沢な話だね 神官が夢にまで見る憧れのギフトなの」

そんな凄いギフトだったのか。

それでもマグの様に加速で無双してみたいのだ。

「俺の夢は加速を使うこと

「神官の憧れを村長が持つなんて人生は儘ならないね

そんなことを言っているイコはやはりにじにじしているのである。
雨が降っているのがそんなに嬉しいのだろうか。

「じゃあ、頑張つてね」

「うん、頑張つてね」

血だらけの身体を引きずつて威圧する龍を前にすると危機感を覚えるが、イコに良い所を見せるために腹に力を入れる。
そういえば龍つて美味しいのだろうか。

地に臥す龍。

滴る水滴。

プウカさん無双。

「妖精だと侮つたらいけないな 予想を超越してビビッた」

「雨が降つてゐからステータスに補正が付いてギフトで雷を落とし続けるとか昔憑いた雷帝みたいだつたね」

ギフト『上縫』を発動し『雨妖精・プウカ』の憑依に成功した場合、プレイヤーはプウカとして判定され、ステータス・設定の一部【ギフト『雷迎』・物理耐性50%・魔法耐性50%・降雨時全ステータス-150%上昇・スキル『避雷針』】を恩恵として貸し与えられる。

戦闘の終了とともにプレイヤーから恩恵が回収される。

「次からはプウカさんと呼ぶことにしよう 仲良くなればまた来てくれるかもしね」

「そういうのは関係ないよ フィールドに発生している現象に関係している仕様が憑くつて条件だし」

俺の思つてたことと違つらしい。

なぜ本人よりもギフトのことに詳しいのだろうか。

「条件とかあつたのか 楽しかつたから雨が降つてたらまた来るつてプウカさんも言つてたんだがな」

「妖精に意識があるなんて初めて知つたよ いや、神にも意識があるつて知つたのは君が言つてたからだけど」

仕様に明確な意識があるといつことは知られていないらしく、俺にもよくわからない。

仕様と意思疎通が取れるのは俺くらいなのでイロにわからぬことが多く、実際は異なる情報もあるそうだ。

「妖精が憑いたのは数えるほどしかなかつたが、無口といつか意識が希薄だつたから話せたのは今日が初めてだな」

「仕様の重要度で意識が変わらぬのかな そこのところはわからないけど、雨が降つたらまたプウカが来るかもね」

やはりわからないことも多いようだ。

とりあえず称号に依存して、ギフト発動はやめてほしい。

「『龍殺し』を得たんだけど」

「称号はソロかパーティで得られるモノだからね 今まで村人だつたから何をしようとも得られなかつただけだよ」

ジョブが村人だと功績が村全体として取られるので称号を得ることは無かつたが、村長として倒したので個人として認識されて取得できたらしい。

村人の扱いに泣いた。

「マジか 村長すげえな」

「村長が凄いといつか、なんといつか」

村長の偉大さに敬意を払いながら称号を『ヒノの後継者』から『龍殺し』に変えてみる。

恩恵の程は……。

「イコ……凄いぞ、この称号……『ヒノの後継者』とあまり変わらないが効果範囲が俺自身になつてると森から出てもギフトを使えるに違いない……！」

「それは良かったね といつか『龍殺し』と補正があまり変わらな

「いつてホント？」

何を疑つていいのか知らないが本当なのだ。

『ヒノの後継者』は陣地として登録されている村や周辺の森でしか補正が発揮しないが『龍殺し』は俺自身に常時発揮するという素敵な称号である。

「本当だ それにしてもこんなことなら称号を探しておけば良かつた」

「『ヒノの後継者』を詳しく調べたほうがいいかも…… ああ、称号は常時発動型なんて珍しいから君が探したとしても見つかったのは条件発動型ばかりだったと思つよ」

称号を取得するのが難しいうえに発動条件もあるらしい。

例えば皿洗い系統の称号があつたとしたら俺は皿洗いし続けないとギフトの効力が発揮しない条件発動型ばかりだとか。

「それだと『龍殺し』は龍を相手にしないとダメなんじゃねえの」

「龍の経験値は魂のレベルを上げるから常時発動型の称号を得られる……らしい そこら辺はボクにもわからないね まあ、強大な敵を倒したご褒美みたいなモノじゃないかな」

村長がクワを片手に精霊を憑依させて龍を殺す。

傍から見たら奇跡というか喜劇ではあったが大したことは無かった気がしないでもないがどうなのだろうか。

「村人ではなかつたとして、俺が取得できそつたことは無かつたんだろうか」

「『常在戦場』しか思い浮かばないね 他にもあると思つけど最近は聞いてないから忘れちゃつた」

称号『常在戦場』はひと月の間に敵の撃破数が一定数を超えると取得できるらしい。

そんなことは無理であり、だからこそ『龍殺し』は嬉しい偶然だった。

「偶然でもありがたいことだけどな

「廻り合わせかもしけないよ」

世界の仕様は必要なときに必然的に廻るそつだ。
運命の歯車が噛み合つたために。

「それは仕組まれてるってことなのか」

「いいや、引き寄せてるのさ」

夢を現実にするためだ。

足りないモノを補つように。

「俺が龍を倒したことも引き寄せられた結果ってことか　運命って
「ひつ」

「どうだひつ　一つだけわかるとすれば、嫌な運命だね」

そう呟いたイ「はいつも通りここにこしながら、俺の隣で空から雨
とともに人が降つてきているのを眺めていた。
ああ、あの人の落下地点は俺の家じゃないか。

「運命を変えたくなった」

「不確定だから運命なのさ」

称号『龍殺し』を取得。

俺は村周辺から出たとしてもギフトが使えるようになつた。

空から雨とともに人が降つてきた。

「薬汁かけとけば大丈夫って言つてたし、塗りたぐるしかねえな」

空から降つてきた人物に俺特性の薬汁を頭から爪先までたっぷりかける。

全身に傷を負つていたのでこれが正しい治療なのである。……たぶん、おやりく、きっと。

「しかし……」

我が家に捨て身で突撃してきた人物を観察する。

イコほどの小柄な身体、艶のある黒髪を白い棒のような髪飾りで結つており、透き通るほどに白い肌は金色の汁まみれ。

「男、か？」

「女の子じゃないかな 詳しくは起きてからにしようよ ほら、持

つてきたよ

龍に刺さっていた数本の剣と顔よりも大きな卵を肩に担いだイコが部屋に入ってきた。
なんの卵だろうか。

「ありがとう でも重かったら やっぱり俺が取りに行くほうが良かったんじゃないかな？」

「ふふ、ボクが行ったほうが良かつたんだよ あんまり重くなかつたしそんなに気にされると困っちゃうよ」

イコが苦笑いするのを見て話を変えることにする。
困らせたいわけではないからだ。

「それならいいんだがな ところでそれは何の卵なんだ？」

「これは龍の卵さ 激く珍しいんだよ」

死んだ龍は転生して卵になり、新たな生として再誕するらしい。
とんでもない生物だ。

「龍の卵か……そいつが生まれた後に殺した相手に復讐するなら処

分するが

「どうなんだろ？ 甦った龍は以前よりもステータスが伸びやすくなつて、最終的には強くなるつて聞いたし記憶や経験の一部を継承しているのかもしれないね」

取り扱いが難しいな。

かなり硬いってえに魔力障壁まで展開されるので卵を砕くにしても苦労しそうだ。

「どうするか 卵の魔力が枯渇するまで攻撃するのは億劫だな」

「龍の魔力は膨大だからいつ無くなるかわからないよ とりあえず放つとけばいいんじゃないかな」

龍の卵は空気中の魔素を取り込んだり、他の生物の魔力を吸収して成長するらしい。

魔力を与えずに放置しておけば魔素しか取り込めず、孵るまでに時間がかかるだらうとのことだ。

「そうだな 放置が良さそうだ」

「生まれた直後なら殻が無い分、簡単に倒せるかもね」

「いつ生まれるかは知らないが、その時の状況によつて対応する。好戦的なら残念だが再び卵へ戻つてもうつことになるだろ?」

「捨てるとか売るとかじゃダメなのか」

「ボクは構わないけど生まれた龍は腹ペコだから周辺を警らうに近くして滅ぼしてしまつから危ないね」

「街一つくらいは簡単に崩壊するらしい。その時に得た魔力で報復に来られても困る。」

「村で暴れられるのも勘弁なんだがな」

「そんなに心配しなくても大丈夫だと思つナゾね」

「イゴが大丈夫だと言うのだから大丈夫だと思つナゾね」とりあえず卵は放置に決定した。

「なんか注意点とかあつたら教えてくれるか?」

「魔力を『えないと』くらいだね

生物が魔素を取り込んで加工されたモノが魔力と呼ばれている。この魔力を使って色々すると魔法が使えるらしいが俺は魔法が使えないの詳しく述べてわかる。

「素手で触るのもダメそうだな」

「そうだねなるべく素手で触らないようにしたほうがいいよ 微量でも魔力が吸われるのを防げるからね」

どんな生物にも魔力があり、気づかない内に垂れ流していることもある。

龍の卵はそういう魔力も吸い取るのだ。

「布に包んで放置しておくか」

「やつておくよ ボクなら吸われる心配も無いからね

「『なら魔力を分解して運べて安全なのでそれを取りに行ってくれたのだろう。

ついでに俺特性の薬汁を『えたらすぐ』生まれるから絶対に近付けてはダメらしい。

「厄介事も放置に決定したし、あとはこっちの寝てる人だな」

「ボクとしてはこっちのほうが厄介だと思うね」

俺も同感だ。

半殺し状態の龍とその後に傷だらけで降つてきた人……なんとなく関連性に気付くわけで。

「面倒な事ばかりだな 去年までは平和……でも無かつたな

「去年よりも大事になりそุดけどね」

また何かしらと死闘を繰り広げることになるのだろうか。

戦闘力の低い豊穣の神でも一応は神クラスのステータスであり、その恩恵を得た俺の腕を食い千切るような魔物と戦うのは遠慮したい。

「あんな化け物と戦うくらいなら薬汁で結界作つて逃げるからな」

「あれは例外だと思うけど……でも何が起こるかわからないね」

過去に俺特性の薬汁を魔物に『えたらレベルアップしたといつ不幸に見舞われた。

他の人が作った濁った汁はダメージを『えるのに、俺の金色の汁は成長を促すとか理不尽である。

「アンデッドが即死だから魔物もいけると思ったのにな

「弱い魔物だつたらエーテルに充てられて死んでただうづけだね

千切れた腕すらも簡単に繋げる俺の薬汁は凄いのだが、強い魔物は取り込むので注意すべきってことらしい。

とりあえず龍には使わないようにしておこう。

「こ」はヒノ村。

汁まみれの人が寝ていて、龍の卵がある小さな村。
そんな村で俺は数本の聖剣と魔剣を眺めている。

「聖剣つてあれだろ、勇者が持つてるやつ 魔剣は……知らん とりあえず伝説的な剣だろ?」

「そうだね 英雄が使つていた武器を聖剣、反英雄が使つていた武器を魔剣つて感じに分類するのが普通かな この剣からは『意思』が感じられないからレプリカだとは思うけど……でも、こんなに精巧なレプリカがあるとは思わなかつたよ」

龍に刺さつていた剣の全てが聖剣・魔剣のレプリカであるというのがイコの意見である。

しかし、伝説的な剣のレプリカが何本も龍に刺さつていたなどという事があるのだろうか。

「昔の人々が龍殺しに使つたまま刺さつてた、とか? あと驚いてるみたいだけどそんなに似ているのか?」

「刺さつていた傷痕が新しかつたから以前から刺さつていたつていの無いかな 剣については意思が無い以外は本物としか思えな

「いよ

内包された魔力、蓄積された経験、神々しいまでの神秘、秘められた能力……。

どれもが本物と酷似していて、違うのは意思が無いこと、一つ一点のみ。

「それはどうなんだ 普通によくあることなのか」

「有り得ない、としか言えないんだけど……」
「ホントに何なんだろうね」

レプリカと言えども本物に似ていれば、その分だけ能力を得るものらしいが最高でも一割ほどの性能を持つ剣を模造するのがやつらしい。

聖剣・魔剣として在るために必要な『意思』が無く、それでも限りなく本物に近い偽物は有り得ないのだとイコは言つ。

「有り得ないモノが有り得るってどんな状況だし

「ボクもなんだかわからなによ ここまで完璧だと清々しくすら感じじるね」

剣を眺めているイコの横顔は形の整った眉を寄せて困った風だ。

俺は笑顔のほうが好きだが、困った顔や苦笑いのイロは何処と無く弱々しくて抱き締めたくなる。

「もしかして俺は得体の知れない何かを拾ってしまったのかもしれないな」

「そうだね 何処からどう見ても普通な要素が無いもんね」

抑えきれずに銀色の尻尾をもふもふしているのはイロが魅力的過ぎるせいで。

何と無く恥ずかしくなつたので意識の半分以上を尻尾に向ける。

「厄介な事ばかりだ」

「それもまた廻り合わせかもしれないよ」

俺がもふもふしているのも廻り合わせかもしれない。

手のひらで撫でると抵抗なくサラサラとした心地の好い手触りを感じられ、軽く握って束にするふわふわと柔らかくてほんのりと暖かいという至福の極みを見いだせるのでイロが癒しの頂点であるとわかる。

「素晴らしい、実際に素晴らしい これが幸せってやつか」

「……ボクは恥ずかしいんだけどね」

少し赤くなつてもじもじとしつつも尻尾は俺から離れることは無い。
まさに「」褒美であり、恥ずかしくて俺も顔が赤くなつともふもふ
を続ける。

「……俺も恥ずかしいけどな」

「ふふ、君は難しいやつだね」

「むじり」の程度の恥ずかしさで離れるなんて勿体無い。

どんなに恥ずかしくてもイコの尻尾には正直で在りたいのだ。

「んつ……ん？」

「起きたな」

「起きたね」

寝ていた汁まみれの人物が目覚めたようである。

まだ寝惚けているのか開きあつていない瞳で周りを見渡している。

「……おはよー」

「ああ、おはよー 挨拶されたんだが？」

「おはよう うん、好戦的では無さそうだね」

完全に目覚める前に村の外に捨てようかと思ったが、やめておいた。レベルは未知数だが龍のように半殺しだとされるかもしれないからだ。

「……あなた方はどちらさん？」

「俺は村長だ 空から我が家に隣落してきたアンタを治療した

「ボクは村人 これは龍から抜いてきたけど君の剣?」

金色の汁で全身ネットにしたのは治療のためであつて、面倒だから塗りたくつたとか無いから。

イコがにこにこしながら剣を差し出し、持ち主がどうか聞いている。

「あ、それ私の ありがと……なんか全身ぬちやぬちやなんだけど」

「全身に傷を負つてたから薬草の汁をたっぷり塗つたせいで 彼女に拭いてもらつとい」

「任せでよ ああ、服は洗濯するんだけど洗つても大丈夫だよね?」

危険な人物では無さうなので、代わりの服を机に置いてイコヒコの場を任せて部屋を出る。

やはり持ち主らしいので、後程イコと相談する」とになるだらう。

「なんか似てるんだよな……」

何もかも違うのに彼女はどこか似ているのだ。
村を訪れたあの勇者に。

「わからんな」

勇者とはそういうモノなのだろうか。
他の勇者を見ればどこか似ているのか気付けるのかもしれない。

龍の卵とか誰得。
もふもふで幸せ。
田見めた汁人。

「うわー、まだ髪がねちょねちょしてる……改めてありがと 私はアラマキ 普通に徹夜でネトゲしてたのに何故か勇者やつてる 名前は取られたままだからアラマキと呼んで」

「アラマキ、ね 名前が取られたつてのは？」

「奴隸に使われる傀儡の術式を勇者に転用してるんだよ 国は勇者を召喚した時に名前を奪つて別の名前を植え付けるのさ ねとげは知らないけど響き的に勇者の世界の何がじゃないかな」

勇者に反逆されたことがあつたので首輪を付けるようになつたらしい。

召喚直後に呪術で自由を奪い、『催眠』系統のスキルで名前の譲渡を許可させて、魔道具に封印する方法が取られているとか。

「アラマキはアルファの勇者に『えられる名前なんだけど未だに慣

れないのよね あ、ネトゲっていうのは……」

「ネトゲとやらの説明は要らん しかし、勇者も不便なんだな」

「アラマキの言い分から考えるとねとげは関係なさそうだもんね それで名前なんだけど過去に勇者が反逆したとき、真っ先に王族と貴族を殺し回つたらしいからね 操れない兵器ほど怖いモノは無いってことだ」

勇者は物好きといふか御人好しかと思つていていたが撤回したほうが良さそうだ。

半強制を強いられてるようで、自由意思もほとんどないかもしない。

「魔王を倒したら自分の世界に帰れるって言われて我慢してたわけで、魔王の居場所を教えてくれるって言われて話を聞いてたらなぜか他国を侵略する作戦になつてて、断つたら王に命令されそうになつたから話せなくなるように魔法をぶち込んだ」

「それは……どうなんだ？ 勇者ってこんなものなのかな？」

「そうだね 命令が発動する前に邪魔されると無効になるようだから命令権の分散や権力者への攻撃不可などが取り入れられるかもしないね でも、アルファは他の国と情報のやり取りをしていない

し、懲々自國の失態を知らせることがないだろうね。だから制限されるのは次のアルファの勇者のみってことになるかも」

イコは何を言つてゐるんだ。

それとも俺がおかしいのだろうか。

「貴族が魔道具を持つてきてドヤ顔で「名前を返して欲しければ言うことを聞け」って言い出したから魔法でそいつごと粉碎した。力がつとなつてやつた。反省はしていないし、後悔もしていない。出来るならもう一度したい」

「ダメだ、こいつおかしいぞ」

「名前を取られたことに屈しないその姿勢、凄くいいよ。権力を得た人間で馬鹿になるからもつと絶望を味合わせてやつたほうが良かつたかもしれないが、ボクも興味が湧いてきたよ」

おかしいのは俺なのか。

いつからおかしくなつたのだろうか。

「名前を思い出せなくとも元の世界に戻つてから誰かに教えてもらえるだろつてアルファから飛び出すときに置き土産で魔法を国全土に降らせて、魔力流で地上まで行こうとしたらカロンに襲われて羽根を切り取つたら落下しあじめてこれはヤバいと思って魔法でなん

とか墜落死を避けようと頑張ってたら羽根にぶつかって気絶して、ここで目覚めたってわけ

「行き当たりばつ当たりだな 空に浮いてる国から飛び出すとかさすが勇者、普通じゃない」

「確かに普通じゃ有り得ないね 龍と単独で戦えるなんて歴代の勇者でもそう多くないよ しかも最弱で有名なアラマキだなんて」

落ちてきた龍はカロンといひじいが名前なんか種族なんか俺にはわからん。

アラマキは勇者の中で最弱だつたらじいが、龍を半殺しにするという偉業を果たしたとか……どうしてこうなった。

「私の素晴らしい才能を發揮したからに決まっているでしょ 天才は武器を選ばずなのよ」

「武器つて使つたことないからわからんがなんとなく凄いってわかる」

「いや、才能があるからって理由で龍が倒せたりほととぎの勇者が龍殺しだよ」

召喚された勇者は戦いに關しては天才的らしい。

勇者には資質がある者を召喚するからとか神にギフトとは別に才能を貰つからとか諸説ある。

「[冗談だけど 実際は聖剣と相性が良かつたからであつて才能は… 称号は持ちまくってるからどうなんだ…まあ、私と聖剣マジパネえよつてこと」

「相性が良かつたらマジパネえよなのか 僕らもマジぱねえよだな

「やうだね まじぱねえよだね

「俺とイコハマジパネえよだ。

田が合図だけで幸せ。

「なにこの空氣、私だけ置いてきぼりなんだけビ 聖剣の話をしただけなのに何故だし

「聖剣とマジパネえよつてのよ」

「天才なら考えればわかるんじやないかな」

「ここにじているイーハを見てほんわかしていると気持ちが満たされる。

ギフトで女神が憑依した場合、イーハに違いないってくらい素晴らしいのだ。

「村長さんと村人さん辛辣なんだけど 勇者つてもつと尊敬されるとかないの？ これじゃソラすぎるんだけど」

「他国の勇者とか排されるのが常だから 聖剣ヒアラマキの首があれば貴族になれるな」

「アルファを飛び出して来たんだよね？ 国の援護無しで孤立無援とかす」「よね」

とりあえず話が通じるらしいから話してるので、略奪とかしようものなら俺も交戦する意思があるわけで。

勇者に悪感情しか無い現状で普通に接していることに感謝して欲しい。

「チートステータス持つて異世界よりも家でネットゲしてたほうが幸せだったかもしれないという現実 何故だし」

「まあ、よくわからんが頑張れ 夢は見ないほうがいいぞ」

「気にしないほうがいいよ 現実なんてそんなものだからね」

村長と村人に励まされる勇者とか。
何故だしつて俺が言いたい。

「優しい言葉をかけられると切なくなるからやめて……優しくしつ
つ褒賞のために勇者狩りとかしないでしょ？ 助けてくれた親切な
村長さんと村人さんと殺し合いとか鬱展開は無いでしょ？ 味方の
いない私の拠点にする予定だから勘弁して、頼むから」

「いや、しないから 大剣を背負つた勇者だったらどうにかして殺
したいけどな」

「というかサラッと拠点にするって言つたね」

悲しいくらい必死なので否定してやるが拠点とか巻き込まれそ
うな
のでどうか行つてくれないか。

大剣を背負つた勇者は言わずもがな、形見を持つていつた敵である。

「寂れた村だし誰も勇者がいるとは思わないでしょ ここが私の拠
点に決定しました 覆りませーん ……冗談は置いておいて大剣の
勇者つてシンカイでしょ？」

「拠点も冗談だよな？」

「シンカイは隣国の勇者の名前だよ 勘違いしてない？」

「そういえばあの勇者は名前を名乗つていなかつた。村で食料や装備を集めていたのは隣国の外周からここまで侵入して消耗したからでは無かるうか。」

「勘違いじゃない 大剣の勇者なら絶対にシンカイだから テストからやり込んで、しかもアルファの記録まで暇潰しに暗記した私に間違いはない あと拠点は超本気だし」

「もしあの勇者がシンカイだとしたら手を出しても構わないんだよな？ 拠点とか外にしろ 外周は広いから好きな場所に行け」

「まあ、隣国の勇者だからね 儂められることはあつても罪にはならないかと どうかここは国に統治されてないから何が良くて何が悪いかわからないんだよね」

日々、神に祈つたご褒美かもしれない。
世界が俺にシンカイを殺れと囁いている気がする。

「外周つて言つた？ 外周とか嘘でしょ、村長さん 嘘つて言つてよ なんでテストのラストイベント並みの場所に村が…… 村？ 村の名前を教えてくれない？ 私の今後に関わるからオネガイシマス」

「うるせえ、薬草でもかじつてろ なあイコ……」

「うん、アルの手紙にもあつたけどシンカイは中央にいたらしいね 都合良く今もいるのならヒーティルフィアに戻られる前にどうにかしないと」

シンカイが今も中央にいるとは思えないが何らかの理由で滞在しているのなら俺には絶好の機会。この先は廻り合わせ次第である。

「村長さんが言つた金色の薬草がどう見ても靈薬なんだけど…？ あと村人の名前っぽいのが聞こえたけど村長さんと村人さんの名前を教えてもらいたいんだけど…？ それから村の名前と、方角と、時系列から進行しているシナリオを確認して、あとは…」

「アラマキのくせにうるせえ 表出わ」

「アラマキのくせに静かにしてよね」

興奮してこるアラマキに罵声を浴びせる。
一人で喋りすぎ。

「質問すら許されないのですか…… 最近の私つたら不運で不幸……」

「教えてやるからイジけんな 先に飯だ」

「そうだね ボクもお腹空いたよ」

アラマキの言葉を信じるのならばあの悪者ほシンカイである。
あとは俺に勇者とやつ合つ踏ん切りがつくかつてとこりだ。

「とはいえ自信が無いんだよな…… 毒殺でも狙うべきか」

「不安なら他の手段を選んでね 無理はしないほうがいいよ」

どうしたものか。

返り討ちにされてイコに迷惑がかかることは避けたいところである。

「ふふ、ボクのことは心配しなくても大丈夫だよ それともそんなに頼りないのかな」

「いや、そんなことはない 頼りっぱなしだ」

いつも一緒にいた。

イコがいたから今の俺があるんだ。

「なら気にして好きなようにしたらいい 真に出来ない」となんて無い ボクが言つんだから間違いなよ

「そうだな イコがそういうのなら大丈夫だな

「ことと微笑んでいるイコは本当に綺麗だった。
見惚れていたが急に恥ずかしくなつて窓に向かうと、床へ降り
続いた雨が止んでいた。

「飯マダア・? (・・・) ハーハ チンチン」

「ちょっとアマキが殺してくる」

「アラマキもシンカイと回じて動者なんだけどね……」

なんかアラマキはぷちつと殺れそうな気がする。
今日は久しぶりの青空だった。

アルファの勇者アラマキ 表出る。

エーティルファイアの勇者シンカイ 表出る。

イコ 女神超え余裕でした。

「で、卑しくも我が家食卓についてるアラマキは何が聞きたいんだ？」

薬草のサラダを出したアラマキがいきなり「それをたべるなんて
とんでもない……」と言ふので黙らせるために無理やり口に詰め
込んだ。

金ぴかに輝いているのであまり美味しそうでは無いが一皿の疲れが
吹き飛ぶので食べている。

「うわあ、私つてフル回復系のレアなアイテムつて出し惜しみして
結局ラスボス戦でも使わないのよね……それがサラダで出されるな
んて……甘く見ていた……つ……無意識にこの世界を見下してす
らいた……つ……インベントリとかなぜか倉庫に繋がるし、とり
あえず何枚か貰つておこう。ドレッシングかかるけど……いや、
戦闘中に美味しく回復できるってプラスあれビマイナスじゃない
ししかも戦いながら靈薬を美味しそうに食べてる勇者つて可愛く
ね？」

この駄勇者はホントに人の話を聞かないやつだ。
手に取った薬草が次々と消えるのは何かの魔法だろ？

「魔法、でも無さそうだね ギフトにこんなのは無かつたし……スキルなのかな 商人なら似たのがあるけど、でも違うよね なんだろ？……はい、もう一個あげるよ」

イ「は勇者の消失魔法に興味津々だ。

次から次へと俺特製の薬草シリーズ（サラダ、汁、ジャム、キャンディ）を渡しては消える様を嬉々として観察し、渡されているアラマキも何故かノリノリである。

100

「ヤバい、マジヤバいわ これだけあれば流石に死ぬことなんて無いでしょ 不死身のアラマキさん伝説が明日から始まってしまうわ……え、なに？ なんか言った？」

「表出る、クソ勇者 伝説が始まる前に俺が人生を終わらせてやるよ

「まあ、勇者は死なないんだけどね」

上位の仕様が憑いたときの鍬は地割れを起こすくらい簡単なのだ。
アラマキの頭なんてそこらの魔物と同じように薬草を磨り潰す感覺

で潰せるに違いない。

「うわっ、悪寒でふるひと……じ、冗談だつてば、村長さんは怖いなあ……ほひイ！」せんを見翻つたりじつへ。」

「アラマキ」ときが名前を呼ばなこでよね。今代の勇者の中でも最早早くこの世界とお別れすることになるよ。」

アラマキに渡す直前だつたジャムが容器「」と砂のよひになつ、サラサラと机に小さく積もる。ここに」と微笑んでいるイーハを見たままアラマキの顔色は青やめていふ。

「で、聞きたこといつのはなんだ？」

「まさか忘れたとか言わなによ？」

「ひあっ……いや、あの、それは……聞きたいことは、えつと……名前……そ、名前が聞きた……あ、まさか名前を聞いて死んだりとか……無いでしょ！？ 無いでしょ！？ 名前聞いたら死亡とかそんな無理ゲーじゃないよね？ 死んで覚えるとかじゃないよね？ ネトゲ世界で私だけ死ゲーじゃないよね？ 他の勇者みたいに冒険していいんだよね？ お願い、神さま……テスト前にしか祈らないし、家は仏教だけど私を助けて……あれ、でも勇者って神様

が誕生に関与してない存在とかそんな設定が……いやいや友好的な神様もいるから助けてくれるはず たぶん、おそらく、きっとダメかもしけない……」

「名前聞くだけでそんな必死になられても困る」

「泥人形たちの欲望が神に祈るとか哀しいモノを見てしまった気分だよ 不運や不幸な勇者は数あれど、歴代で最も可哀想な勇者はアラマキかもしけないね」

イコが言っている泥人形とはヒトを示しているらしく、最近ではあまり言わなくなつたがそれでも時々は泥人形と呼んでいることがある。

俺やイコは泥人形では無いそうだ。

「で、名前だつけか 教えてもいいぞ」

「ほ、本当ー?」

「ただし聞いたら死ぬけどね」

エリエリレマサバクターとか言いながらアラマキが崩れ落ちた。薬草をもしゃもしゃして見守る。

「ちなみに『神よ、何故私を見捨てたのですか』って意味で私が持つてる剣の一つに銘もあるわけで」

「おまえ余裕あるだろ」

「それを持つてるってことはアラマキは神に見捨てられたことじゃないの?」

立ち上がってすぐに飯を食べ始めるアラマキを白い皿で見るが気にせずにはパクついている。
が、イコの言葉に焦りだした。

「え、いやまさか無いでしょ? そういうの関係ない、はず……だ
し? ある? いや、でもギフトあるから一応神さまも私に目をかけてくれたわけで それともゲームとは違うとか? 無い無い……でも見離された場合はヤバいし うわあ、やっぱり無理ゲーかもしけない……でも生きてるし大丈夫、と考えないとやつてられない」

「なんか悩んでるみたいだな」

「色々あるんだらうね でも勇者については記録があんまりないか

らわからない」とばかりだよ。脅威になつたことも無いからほとんど調べてないし、ここにずっといるから最近のことはサッパリだし

調査に特化したイコの同胞が色々と情報を集めているが勇者についてはあまり調べていないらしい。

資源のある土地の奪い合いや戦争でいつも勇者同士が殺し合ひので調べる必要性は皆無だつたからとか。

「でも村長さんの近くにいれるつて事は神さまも黙認してるつて事だし案外大丈夫だつたり……とか思わせて鬱展開も有り得る。うわあ……どうしよう、うわあ」とりあえず交戦前らしさいってことしかわからぬし聞いてからじゃないと、腹をくくるしかないね、展開的に考えてシナリオのラスボスを一人でやつてたようなぶつ飛んでる村長さんと村人さんだし非常識を乗り越えるくらいの気概で頑張るのよ、私女は度胸で貧乳はステ、毒を食べたらおかわりして三杯目をそつと出す、やらないより殺られて真実を知る、つてくらいで逝くしかない……。さあ、私を殺して……。あ、出来れば優しくお願いします」

「いや、決意を固められても意味わからんし」

「うん、頭おかしいよね 力チ割つて薬草入れてあげたらいいかも」

グッと両手を握り締めてさあ早く、なんて言われてもどうしようと。あと髪の毛が薬汁で金ぴかのままがいいのだろうか。

「え？ 私が死んだら名前を教えてもくれるんでしょう？ だから一息で殺っちゃってください 出来れば村長さんが良いです 村人さんが殺つたらマジでヤベーです 私よりレベル高い人が砂みたいなエフェクトを残して即死したのをこの場で再現されても困るので村長さんに優しく殺つてもらつたほうが安心 攻撃された瞬間に靈薬呑むけどいいでしょ？ その一死で勘弁して 土下座するんで 全力でゲザるのをお願いします」

「いや、殺さないから 「冗談だからな」

「うん、冗談でもいいよ 勇者つて殺すの大変らしいし」

喜んでいるアラマキがうるさいので薬草を口に詰め込んで黙らせる。イコが食べてるんだからゆっくり眺めさせる。

「死ぬ決意までした食事でレベルアップしてしまった……何故だしさか私の決死の覚悟が生存本能により云々とかなんとかは絶対に有り得ないです、すみません」

「薬草……が使われてて有り得ないほどのエーテルで構成されてるからね、この料理 高位の魔物を倒して経験値を稼ぐよりも割はいいんだけど高純度すぎて弱かつたら耐えられなくて死んでたよ 龍とも戦えるし、普通に食べられるし、アラマキはかなり高レベルだ

ね

エーテルとは魂を構成する基礎であり、吸収することによって存在の格が上がるのだとか。

格をレベル、他の生物のエーテルを吸収することを経験値を稼ぐなどが冒険者の用語であるらしい。

「最後の晩餐になるところだつた 自然な不意討ち……つー！ 油断しなくとも死にかける……つー！ 死亡フラグが多くていつの間にか折れてるを実践してゐる気分です」

「煮汁やジャムなんて更にエーテルを搾つて結晶化させたような代物だからね 自信が無かつたら口に入れないとほつがいいよ ほとんど賢者の石の一種だし」

エーテルは神様を構成しているうえに好物のよつたものなのでギフトを使うと持つていかれるが収穫期に薬草を搾げると持つていかずに憑いてくれるし、汁やジャムなどに加工すると喜ばれる。

薬草は一年中摂れるので持つていかることなんてほとんど無いが。

「蘇生アイテムが存在しているとは……うわあ、この煮汁のアイテム名が『エリクシル』だし 飴は『第五実体』、ジャムなんて『大エリクシル』 完全に賢者の石です、気軽に呑んだら不死になつてしまつわ……村長さんて鍊金術師なの？ 私の現実が崩壊寸前です」

「まあ、第五元素のエーテルで構成された靈薬で作ったモノならそうなるよね。今は調味料にまで入れてるし、普通は煮詰めることすら出来ないけど、それすらも乗り越えて母のために物心ついたばかりの少年が作つたってところが凄いよ。ちなみに死亡直後なら蘇生できるし、不死とはいかないが魂の劣化は抑えられるよ。台所にある食材のほとんどは靈薬が入ってるかな」

整った眉とつり目がちで少しキツイ印象を与える金色の瞳に宿る慈愛はさながら地母神のようであり、瑞々しいふるんとした小さな唇が色気を感じさせ、つやのある形の良い鼻と透き通つた白い肌が全体のバランスを調べ美しさの中に可愛らしさを感じることができる。背中を流れるようなわらわらの長い銀髪、そして狐耳と九つの尾が光を反射して淡く輝き、一思いに抱き締めてしまいたくなる愛らしさとそつと消えてしまつでは無いかと思えるほど纖細さのアクセントになつていて、村や国・世界で一番だとかそんな小さいことに拘つているのがバカに思え、イロを唯一の美として讃えたくなる。

「なんかこの家が怖くなつてきた。靈薬の栽培してゐし死者蘇生とか企んでるんじや……」

「アラマキは解るのにシンカイは気付かなかつた。同じ世界から来てるはずなのに違いがあるのかな。栽培というか使徒が神のために……ああ、そうかヒノつて何だつたか忘れてたよ……それで死者蘇生は試したら失敗、別の何かになつてね。飴を魂とした魔物になつてしまつたんだよ」

キツネ型も可愛いし、ヒト型も綺麗だ。
どちらも良いので迷ってしまう。

「（ 。 。 ）アーアーきこえなーい 話が地雷ばっかでお腹いっ
ぱいです …… 村長さんが村人さんを見つめたまま固まつてるけど
幸せそうだよね」

「ふふ、そうだね 苦労は人知れず、努力は人一倍 それでも笑つ
ていてくれるのが嬉しいよ」

イコ「は昔から変わらずに綺麗だ。
だが俺は変わっている、変わってしまう。

「話も逸れすぎたし、お開きにしようか そっちの奥の部屋が空い
てるから好きに使ってね」

「ああ、はい ジャあありがたく借りるね 村人さんはどうするの
？」

このままではイコを置いて先に行ってしまう。
いや、置いて行かれるのが…… 一人になるのが怖いのだ。

「……」彼は何時も能天氣なのにボクのことで変に困むからね

「ふうん？」

何か無いものか。
イロの隣にいるのが、難しい。

「自分のことは何も悩まないのこね」

「確かに 瞬薬を薬草つて言つたり、料理して賢者の石シリーズを作るとか自由すぎる 全てに關して隙と死角だらけなのに勝てる要素が無い気がする」

望むことは叶えられる。

イロが言つていた。

「今日の内にビーフでも聞きたいなら夜に村の中心に行けばいいよ
ボクは寝てるけど、彼は起きてるから」

「……む、どうしようかな……」

全ては廻つ合わせだ。

引き寄せることも、もしかしたら……。

「好きになよ」

「うふ、好きになりますとも 桃色空間で死にたくなったし部屋に行
くわ……ああ、妬ましい」

「ひゃー、イコさんマジ女神。
微笑まれると爆発しそうになる。

アラマキは薬草が好きなようです。

村人は微笑んでいるようです。

村長は幸せですが悩み事もあるようです。

雨が止み、空が晴れた。

明日には川が現れるだろう。

「アラマキ……髪は洗ったか？」

そんな日の夜には雪が降る。

白い雪がヒノに。

「魔法でバシャッとやつた 加減がわからなくて頭を吹き飛ばすと
こうだつたけど、私は元気です あと部屋の屋根が龍の羽根なのは
私への当て付けとかならマジ勘弁してくださいよ

黒髪を頭の後ろ辺りで結い上げたアラマキがヒノと近寄り、俺
の横に腰を下ろす。

服を着替えた姿はヒノと同じ年くらいの少女に見える。

「羽根とか忘れてた……しかし、女だつたんだな」

「女の子の一人旅は危ないかと それで男装しようと城にいる執事見習いの人の服をパクって着たわけで 貴族のヒラヒラは嫌だし、街に出られないから普通の格好がわからないしで世話係にもいた執事に目をつけたのさ」

キラッとかなんかムカついたが俺は大人なので流すことにする。
旅するのに執事服を選ぶとかよくわからんがアラマキなので仕方ないだろ？。

「そりゃまあ、あれだ 龍や剣が無かつたら外に放り出してたな
あと挨拶と勇者の名乗りが無くても外に放り出してたかもな」

「死亡フラグが多いぜ！… もう諦めた 亂立してるのは無視して
超頑張つてへし折る そして過去の私ぐつじょぶ！… 寝起きでテ
キトーだつたけどぐつじょぶ！…」

仕立ての良い服だが地味なので許したが、もし貴族っぽい服だつたら村の外に放り出して死んでもらつたところだ。

やんごとなき身分の方々とやらは面倒だしイコも嫌いなので勝手に死んでもらつたほうがいいのだ。

「ああ、剣と言えばイコが気になっていたな 有り得ない精度のレプリカだつて」

「村長さんは興味があつたりする？ ……奪つたりする？」

無いな。

全く興味無いし、欲しく無い。

「いや、全然 イコが楽しそうだつたから何となく、な イコも自分で答えを出すのが好きだし直接的な事は聞かないだらうな」

「いやいや、予想と全然違つような それでいて、一人らしいと感じてしまつような テキストだけじゃわからないものだわ、こういうのつて」

イコが楽しいなら俺も楽しい。

アラマキはバカっぽいが悪いやつでは無さそつなので無理やり調べる必要も無いだらう。

「俺が興味あるのはアラマキのことだな かなり知りたいことがある」

「まさか村人さんを差し置いて恋愛ルートに突入！？ 私の魅力が

引き起こした悲劇！？ 中性的で小柄な男と思っていたが、実は可憐な少女だと知つて抑えきれない想いが原因でフラグ建設しちゃつたり！？ 私つたら可愛くて罪作りな女で「ごめんね！！」

食前の手洗いや食器の使い方などアラマキの細かな仕種から一定の水準以上の教育が見て取れる。

勇者がいる元の世界も気になるが、それ以上に俺の興味を引くモノがある。

「アラマキの言葉はよくわからんのも多いが俺とイロの事を以前から知つているような、そんな言動が節々から感じられる おまえは何を知つているんだ？」

「スルーされたし甘酸っぱい恋愛は無しだし……じゃなくてそれはですね、あのですね……やっぱり説明したほうが宜しいですかね？」

アラマキと俺たちの接点は無いはずだ。

それなのに見知った風な様子が気になるのは当然だろう。

「せうだな まあ、虚偽でもいいがな

「私は義理堅いと自負していまして そんなわけで助けてもらつておいて嘘はつかないわけで」

「私だって眞面目なときは眞面目なのですよ、きりつ」などと澄ました顔がムカついた。

眞剣な顔なのにやたらと胡散臭い気がするが、可哀想なので指摘はしないことにする。

「ちよつと長くなりますが構わないでしょ？ でしょ？」

「却下 おまえは話が長いから簡潔にしり」

アラマキは一言がやたらと長いし、話がよく逸れる。あの勇者とかなり違つようだ。

「なん……だと……なるべく省くんで勘弁して欲しいわけで 話す前に村長さんの名前と村人さんの名前を教えてもらえるとありがたいかなあ、と」

「ああ、そういうえば聞きたそうにしていたな 僕の名前はヒジリ、見ての通り人間でヒノ村の村長 で、食事のときにも一緒にいた少女がフォックスタイルのイコ 唯一の村人だ」

イコの見た目は獣人の狐族なのだ。

ヒト型も綺麗だが獣型の彼女は胴と足がスラリと細長く、銀色に輝

いていて美しい。

「唯一？ ヒノ村は廃村のはず…… ああ、もしかしてこれが占拠なのかな…… ええと、勇者と戦つたとかは？」

「無いな 勇者に興味も無かつたが折り合いが付かなかつたら戦う機会があるかもな」

イコも好きにしろと言つてくれたが話し合いで解決できやつなら交渉したほうがいいとも思つ。

無理そなうならパーティを毒殺して不意討ちで優勢に持ち込んで戦闘の流れでいくかもしね。

「つづむ、 テストのラスト直前つて感じかな…… まあ、いいやアルファの勇者・アラマキが村長さんにご説明しましょー！……あ、 でもアルファから逃亡してゐしアルファの勇者（）じゃね？ というかアルファの勇者とかチヨー嫌なんですけどー」

「おい、 逸れてんぞ しかも思考が漏れてることも多いし 嫌ならヒノの勇者とか名乗つてろ」

語句の多さと逸れる話、駄々漏れの思考はコイツの話術か何かかと疑いたくなる。

ヒノの勇者とか弱そだな…… いや、ヒノに悪いが。

「称号が『ヒノの勇者』に書き換わるとか神さまがリアルタイムす
きて流石村長さんとくべきか、むしろ通り過ぎて怖い　いや、村
長さんも睨まないで下さいよ　ちゃんと話すんで　あれですよ、考
える」ことが多すぎて口に出さないと纏まらないといつか　あとは久
しぶりに話せるから嬉しくなって饒舌になっちゃうのと生来のモノ
です　赦せ、村長！－！」

「はいはい、わかったから話を進めような」

アルファでは軟禁状態で息の詰まる思いだつたらしい。

好きなように喋らせてやろうとも思うが話が逸れるのはダメだ。

「申し訳ないです　とりあえず勇者といつのは異世界から召喚され
るわけで　その召喚先の世界でネトゲ……ええと、物語を舞台にし
た箱庭を共有して複数人で擬似的に生活を体験できるのですよ　つ
まり世界を作つて第一の人生的な　ここまではおｋ？」

「何となく」

勇者の世界では遊ぶための世界を作り出せるといつ創造神クラスの
ことが出来るらしい。
何の「ことかわからないが関連性があるのだろう。

「その物語が関係するんだけどね 私がやつてた物語がこの世界によく似ている世界だったわけで」

「え、まさか私が創ったとか言い出す展開？ だったら自殺するわ」

「こんなやつが創った世界とか嫌すぎる。

でもイコを残すのは嫌なのでアラマキを殺すことにすむ。

「ちょ、なんか殺氣がヤバい 村長さんの勘違いで私がヤバい そんなこと言わないから落ち着いて……そのクワをゆっくり下ろすんだ 殺人なんて虚しいことはやめたまえよ」

「[冗談だ アラマキにそんなことが出来るわけがない」

鉄をしまう。

ホントだつたら全力だつたが。

「マジで死亡フラグが多すぎる…… 地面に落ちたクワが消えたとか気にならないレベル 決して地雷は踏まない もう話を進めてもいいでしょ？ 私は死にたくないのよ……」

「カツコつけた話し方するからだ」

要点だけで話してもらいたい。
何なら百文字以内とか。

「なんと辛辣なことが…… もつぱっと話しますけどその世界に村長さんと村人さんがいて物語の最後の敵として立ち塞がつたので七国の勇者と私のように物語に参加していた人に倒されたってことです」

「え、アラマキが俺を討伐？ 表出る」

もう表ですよ、ならば死ね、おのれ裏切つたな、冗談だ、はははこやつめ、などと適当な言葉の応酬。

作られた物語に似ている世界で敵だった人物に助けられるとはどんな気分なのだろうか。

「私は倒していいけどね つまりこのひ、物語のシナリオと比べていたというか 進行を確認していたというか」

「で、どうだった？」

俺が問い合わせているのは世界が似ているかどうかだろうか。
それともシナリオとやらの進行だろうか、自分で曖昧だ。

「世界はそのまんまっぽいのにアルファの勇者が私だつた時点でなんとも シナリオも微妙 何故なら私がいるから」

「自分が乱してたら世話ねえな」

ダメだこいつ。

早くなんとかしないと。

「似た世界は似てるだけなんでそれくらいがちょうどいいかなとシナリオを盲信すると突然ズレが生じたときに焦りますからね 村長さんが興味あるなら始まりから終わりまで詳しく話しても良いですよ？」

「いや、 いらんな 興味ない」

似ているだけで本物とは違うのだから知る意味は無いだろ？
知つて何になるというのだ。

「そうでしょうね 知りたがる村長さんとか想像がつかないし 実はもつと魔王みたいな人だと思ってたのに普通で微妙な気分になつたわけで 村長の一撃、プレイヤーは死ぬつて感じで」

「いや、よくわからんが 魔王みたいなつてどんなんだ」

アラマキの知つている俺は群がる超上級の冒険者を一撃で蹴散らし、勇者を優先的に殺しまくつていたとか。なにそれこわい。

「デスペナ祭りとか運営マジ鬼畜 報酬は陣地と称号だけど結局は倒した人の総取りだから損失でかすぎだし というか片側を放つておいたらフル回復する理由がコレとは……」

「おい、薬草を勝手にむしるな」

忌々しそうに薬草をむしるアラマキ。

次々と手に取るので頭を小突いて止める。

「あいたつ……」「なんにあるんだからいいじゃないですか ケチだなあ」

「セレニにあるから貰つていいくついていつ勇者の考えはやめり そういうえば聞きたいことがあるつて言つてたが何だったんだ?」

勇者は欲しいモノを自分の物にする手癖の悪さがあるから咳を付け

ないといけない。

あんなに必死だったのだから重要なことだらうか。

「いや、もういいんで 色々と考えて生きよつと思つたけど自分が
いるだけでズレるとかどうでもよくなつてしまつわけで」

「やうか」

金色の薬草に積もる雪を見るのが俺は好きなのだ。
月明かりに照らされた雪が輝く風景は幻想的である。

アラマキは女の子。

静かに雪が降る。

「ええと、聞きたいことが思い付いたわけで 私の知ってる村長さんは村の中と周辺しか行動できなかつたんですけど村長さんもそうなのですかね」

「いや、出よつと思えれば出れるけどギフトが発動しないからな ギフトの使用には称号が必要だから活動範囲も狭まるつてことだ」

俺の『上縫』は仕様という世界に存在する知覚出来ない超常を自分に憑依させる強力なギフトだが、薬草や薬汁を捧げないと経験値やレベルを持つていかれるうえに戦闘でしか発揮しないので手軽に使うことが出来ない。

俺がヒノに住んでいなかつたら発動しない無駄ギフトかと思つと恐ろしい。

「じゃあ村長さんの家から何か盗んだら外周を走り抜ければ逃げ切れるんですね！？ 機嫌損ねたらとんずらしても生き延びる！？ 私つたら素敵で狡猾でゴメンね！！」

「今は『龍殺し』の称号を得たから地の果てまで追い掛ける」

憑依したときは攻撃レンジが称号の範囲に限定されていたが『龍殺し』に換えることで解放される。

俺は何処にいようと……もちろん迷宮に入ったとしてもギフトを発動できるようになつた。

「（< o >）○こ・・・まあ、そりないな」『氣を付ける』ことにします 範囲が限定されてるギフトってあつちでもこつちでも初めて見ますよ 勇者の私ですらもつと使いやすいわけで」

「だよな 『加速』とかなりもつと手軽だつたろう」

『加速』は羨ましい。

『加速・壱弐』で発動し、式式、参式と数字が増えることで速度が上がるらしい。

「称号の効果が発揮するのにも範囲があるんですね？ なんか意味があるわけですかね」

「あるんじゃねえの 考えたことないけど 範囲の起點せりだけどな」

称号『ヒノの後継者』はヒノの生活圏で発動するのだ。
発動限界はヒノの散歩コース（遠）である。

「これ……つていつと座つていてる綺麗な岩、といつか石が？」

「ああ、俺が座つてるのがヒノ おまえのがシラコキの墓だ」

座るのにちょうどいい黒い石がヒノの墓、白い石がシラコキの墓である。

『ヒノの後継者』は薬草を神に捧げる役割であり、ついでに墓守りもしているのだ。

「ひあっ！… なんて所に座つてるんですか！… 失礼極まりない
わけで… 悪気は無かつたんで許してください…！」

「そんな大袈裟な」

石に凄まじい勢いで謝つて いるアラマキを冷ややかに見詰めてやる。
気にすることでも無いだろ？。

「こやこやこやこや、何を言つてるんですか 天罰、といつか神罰
下るでしょ どう考へても 死にたくないのにフラグばつか立つん

だもん、死にたい……」

「なんか矛盾してるぞ 罰当たりな事なのか 僕の父さんと母さんはよく座つてたし、俺とイコも星を見るときはよく座るんだがなじいさんもばあさんと座つて話してたって言ってたし普通だろ」

腰掛けぐださこと言つてゐるよつた形だし。

他の村人が座つたら翌日に死んだこともあつたが俺に害は無いので大丈夫だろう。

「え、まさか神罰の前に村人さんに殺される予感……つ……これが神罰とでも言つのか、神よ……」

「忙しないやつだな」

ヒノヒシラユキは互いを傷付けることのない深い信頼で繋がつていたといふし、俺もイコとそんな関係で在りたいものだ。

といふか天罰云々なら形見の剣を取り返さないとダメな気がする。

「なんという涼しい顔……ヒノの村長は格が違つた……つ……村長さんに涼しい顔とか言つて何ですけど私が寒くなつてきたわけで」

「格ならずなんな高くないがな 寒いなら部屋に戻れよ

ギフト無しで村周辺の魔物と戦闘したら苦戦するくらい微妙なレベルだ。

迷宮に潜るパーティに誘われたとしても断るのは当たり前だひつ。

「まだここにいます こんな私の世界じゃ滅多に見られないから
ね 貴重つてレベルじゃねえぞつてぐらこヤベーですよ、といつ
らい勿体ないわけで」

「やうか まあ、好きにしりよ 上着は貸してやるかい

夜は冷えるし、雪も降つてるので女の子にはシワこだわる。
サイズはでかすぎるだらうが無いようはマシつてことで我慢じる。

「テレた!? ツンデレだつたんですね!? あんなに厳しかつた
村長さんが見せた優しさ……私、きゅんきゅんきました 飴と鞭の
コンビネーションの偉大さを知つてしまつた……つー! 恩ろしい、
眠……つー! どうせ風当たりが強い言葉が来るとわかつていても
甘えたくなる……つー! 恍れた、だから財産ください 全部でい
いです 料理のレシピも欲しいわけで でも私から情熱的に押し掛
けてラガつても村人さんに抹殺されそつなので告白してもいいのよ
?」

「そつか死ね」

「死の宣告ーー?」

きやーきやー言い出すから何かと思って聞いた俺が馬鹿だった。

むじりアラマキが安定した馬鹿っぷりを發揮したというのだろうか。

「ふざけただけじゃないですか 冗談にしても死ねは酷すぎると思
うわけで」

「すまない 心の底からだつた」

「辛辣すぎるよ…… もつと私に優しさをください…… 私だつて
幸せになりたいわけで」

地面に座り込んでイジけだしたので言い過ぎたかと近付くと次々と
薬草を盗むアラマキの姿が……。
おいやめる。

「殴るぞ」

「もう殴られたわけで……」

今のは頭を小突いただけだ。

次はギフトを憑けて全力でかち割る。

「ホントに手癖悪いやつだな……」

「田の前に命が一つ落ちているとするでしょ？ そしたらどうする？ もちろん、私なら捨う 水が流れ出したら止まらないのと同じ 欲望も止まらないでしょ 我慢もそう つまり私は悪くない あるのが悪いわけで だからください いっぺいでいいよ」

「ぶち殺すぞ」

流れ出す前にどうにかしろ。

原因を根絶するために息の根を止めてくれってことだらうか。

「すみませんでした もうしないので許してください 臨戦体勢とか怖すぎるわけで メラメラめっちゃ熱いんでマジ許してください や、やべえって マジやべえって 助けてHele me!..」

「炎帝が憑いたのに勿体無いな」

一撃必殺すら狙える強さである。
実に勿体無い。

「今のはヤバかつたわけで」

「おまえが悪い　ああ、今まで聞きたいことを思い付いた」

何と無く思い付いた。

せっかくなので聞いてみるとしようつか。

「なんですかね　まさかどんな死に方がいいかとかだつたら天寿を全うしてポックリと言いたいですけど死にたくないでの今の若さを保つたまま永遠の命が欲しいわけで　つまるところ無茶なフリはやめたまえよつてことです」

「俗っぽいやつだ……　俺の中での勇者像が変わりまくつていてる
そう身構えるなよ　聞きたいのは俺らが勇者や冒険者に討伐される
つて言つてたよな」

七国の勇者と冒険者が投入されるとかどんな状況だし。
過大評価にも程がある。

「詳しく聞きたくなつたとか？　仕方ないですから教えて差し上げ

「でもそれは何でいいんだよ？」

「いらん なんだその口調、気持ち悪いな 侵攻が始まつたらどうちに味方する?」

似合わない口調だ。

滑稽を通り越して可哀想ですらある。

「気持ち悪い…… プレイヤー側って言いたいところですけど、ヒノに付いてあげますよ」

「ふうん でも死にたくないんだろ 向こうのほうが良くないか?」

全体の人数は知らないが向こうのほうが多数なのは明らかだらう。それに勇者もいる、有利にしか見えないが。

「言つたぢやないですか、私は義理堅いんですよ しかも拠点をここに決めたのに攻められてヒノの勇者が黙つてゐるわけにいかないでしょ？ これでも勇者なわけで 私がいるだけでかなり違いますよ というか私が加わつたら圧勝ですね 勝ち馬に乗るのも大事なんですね 数の利で調子に乗つていた勇者たちが倒れている前で私が元気に「ごめんね、強すぎちやつて」とかやつてみたいわけで 優越感ハンパないですね こういうのつてありでしょ？ なんかイベントが起きて欲しくなりました」

「なんか邪だな……まあ、いいか」

アラマキっぽいというのだろうか。

下手な言葉よりはしつくづくるので及第点としてやうやく。

「え、これって……」

「村を拠点にするんだろ よろしくな

村長としてアラマキを村人に登録する。

アラマキのジョブに村人が加わったらしいことになる。

「よろしくです!! 誠心誠意がんばりマスター!!」

「村人を、か……?」

アラマキが新しい村人として加わった。

「」を拾つたあの時と同じ、雪の降る夜だった。

「つこでに愛の告白をしてくれてもいいのよ?」

「ぶち殺す」

「勇者殺しの血刃それてしまつたわけで」

ただの馬鹿だ。

馬鹿にしか見えない。

ゆきふるよる に アラマキ が むらびと に なつた ぞ ！！

「アラマキが村人になつたぞ」

俺の朝は早い。

昔から変わらない。

「いいんじやないかな 称号が『勇者』でジョブが村人つていう間の抜けた感じがアラマキっぽいし」

イコの朝は早い。

昔から変わらない。

「勇者つて全員あんな感じなのか」

「ビハだわうね」

村を囲むように煮汁を撒くのが朝の日課である。

「つする」とで薬草の煙を魂とした巨大な魔物に見立てる」とがで
きている、らしい。

「朝飯は魔物の肉でいいか」

「うん、いいと思つよ パンに挟んだら美味しいんじゃないかな」

魔物に見立てた村に襲いかかってくる魔物がときどきいる。
力量を測れない馬鹿はそのうち野垂れ死ぬだろうし俺に喰われたほ
うが幸せだろう。

「ギフトすら不要」

「いつ見ても惚れ惚れする一撃だね 首と胴が綺麗に別れたよ」

鍔は非常に便利だ。

鉄製の刃・木製の風呂・木製の柄から成つていて、俺は畠仕事をこ
れ一つで行つてゐるし、首を刈り取るのに都合のいい形もしてゐる。

「小型なら首刈りするだけだし楽なんだがな」

「文字通り朝飯前だもんね」

『首刈り』は攻撃が頸部に当たると確実にクリティカル判定になるお手軽スキルだ。

魔物の首を鎌で狙い続け、一撃で刈り取れるようになつてもひたすら狙い続けていたら修得したスキルであり、大型の魔物などにも発動するのでギフトを使わないときは重宝している。

「村人から村長になつたら称号が増えまくるんだが、今なんて『竜殺し』だし、料理してたら『フーメルの意思』と鍊金術師のジョブが、龍の死骸を見てたら『ファウストの再来』まで手に入る始末バグつたのか？」

「バグつてないよ。今まで取得しなかつたモノを一度に取得してからそなうなるだけだね。『竜殺し』は朝ご飯にするその魔物が低級の竜だつたからだよ。」

こんなに弱いのに竜だつたらしい、初めて知った。マグも余裕で屠つてたし、竜つて弱いんだろうか。

「ふうん？ まあいいか。今日は畠広げるぞ。ちよつと壊れた家と焼けた家があるし。」

「うん、頑張ってね。」

イコがいるだけで十分なのに応援までされてしまった。
今日は休憩いらずの予感がする。

「頑張るからな、イコのために」

「ふふ、照れけやうよ」

朝から幸せだ。

もう時間が止まればいいのに。

「ちょっと私を無視して桃色空間を形成するのはやめたまえよ……」

「いたのかよ」

「いたんだね」

軽装に身を包んだアラマキが巨大な黒い大剣を肩に乗せて立っていた。

息が荒く、肩が上下しており、汗も流れている。

「なにそれひどい 私の獲物を横取りしておいてその反応は鬼畜で

しょ しかもクワで一撃とかぶざけるんですか 経験値の横取りは嫌われるわけで し過ぎるとスレに晒されても知りませんよ だから早く私に謝るべき」

「知らん 朝早くから何してるんだ つうか剣でかすぎるだろ、おまえよりでかくね?」

「魔剣『アナキズム』……だね 意思がないから完全に攻撃力の高いただの剣だけど」

やはり魔剣らしい。

高尚な武器なのにアラマキが持つと冗談にしか見えないから困る。

「何つて訓練に決まってるわけで レベル高くても自由に動けないと意味ないのですよ そう、アナキズムです けど使いにくいですね 大きさは構わないんですけど手に馴染まないので別のも試してみます」

自分に合つた武器を探しているらしい。
大きさよりもしつくり来るかどうかとか。

「聖剣使えよ」

「何言つてゐんですか 私の聖剣は武器じゃないわけで」

剣じゃねえのかよ。

なんだこいつ、ホントに勇者か。

「アルファ最弱の理由だもんね、聖剣 先代は精巧な絵柄の書かれた紙束を無限に造り出したとか その前は太っていた勇者が突然痩せて顔が変わつたらしいよ」

「色物ばっかりだな 現にアラマキ見てたら納得してしまつな」

アルファの勇者は他の勇者と交戦するまえに撃破されてしまつとか。召喚する意味あるのだろうか。

「たぶん、その紙束は私の世界のお金かな 後者はイケメンとか二コポナデポが理想だつたとか 運が悪かつたのにはちがいないわけで」

アラマキが白い髪飾りを髪から外す。

結つていた時には気付かなかつたが、髪は長いようだ。

「髪にクセがあるので恥ずかしいわけで 金色のねちょねちょを洗つたら艶が凄い」

「気にしなくともこいんじゃね 可愛いと黙つたがどな

「うと、可愛いと思うよ そっちのほうが女子らしく

髪を抑えていたアラマキが赤面して慌て出した。
普通に恥ずかしがつている姿は年相応に見える。

「えつとえつと、ありがとゴザイマス? 気にしてるのを褒められ
ても複雑なわけで 恥ずかしいんで話を進めます!! 異論は認め
ない!!」

「好きでいいよ 騒がしいやつだな」

「何なんだろうね もう少し落ち着けばいいの?」

まだ顔が赤いが話を進めるらしくるので指摘しないこととする。
もつと弄れそудが許してやる。

「変な汗かいたし、顔も火照つてゐるし とりあえず落ち着くのよア
ラマキ……さん、に、いち おちついたーへへ ふう、間違いなく
落ち着いたわ」

「良かつたな」

「良かつたね」

良かつた良かつた。

復帰が早くて俺もうれしいよ。

「よし、話を進めますね」この髪飾り、見た目は玉簪に似ていますけどアルファの聖剣です

「タマカンザシってのは剣の形はしないんだな 遠くからでもそうだったが、近くで見ると綺麗なもんだな」

「英雄が使っていた物が聖剣と呼ばれるから、必ずしも剣であることは無いんだろうね 武具だって多種多様な形状をしているだろうし

「昨夜見た雪のように真っ白な髪飾りで淡く光を放っている。小さな玉を細い棒が貫いたような形をしており、アラマキの黒髪によく映えるのだ。

「これは勇者が持つ聖剣の中でも特殊なんです 他のようにステを特化させるのとは違い、自分で引き寄せるわけで 説明しにくんですけど、何とか伝えるなら理想を持つてくれるって感じですね 先代はお金持ちの姿を、その前はモテる姿のよつに」

「超ビッグでもいい話だった 飯にすんだ 朝飯は肉だ、肉」

「ボクは面白い話だと思うよ 勇者と聖剣は繋がっていて、意思を介して超常に接続するのだから、さじ加減次第で何でも出来るかもしない アルファの聖剣なら安定はしないけど、強大な力を得ることも不可能じゃないよ」

つまりアラマキは分の悪い賭けに勝ったみたいなものか。
アルファは試合に勝つて勝負に負けたようなものだし、思い通りにはいかないんだな。

「私が何を引き寄せたかとか興味ない感じですね なにこの敗北感、悔しい…… え、朝食がそれ？ おかしくね？ 竜とか朝からとかボリュームたっぷりとかそういうレベルじゃないでしょ？ 朝からイベント発生とか許してくれませんか？ そろそろ常識的に考えさせて欲しいわけで、常識的に考えて」

なんか独り言が激しかったので先に家に戻ることにする。
イコを待たせるなんてとんでもない！！

「パンに味付けした肉と薬草を挟めばいいよな
スープもあるし」

「今日も美味しそうだよ さすがだね」

素晴らしこ手伝いがあつたからせ、なんて言ひながら、ついでにいふ
いのイロを見詰める。

「……貪るか」

「ふふ、
そうだね」

て
い
る。

いつもより賑やかな朝食だった。

まものにへづまー。

いこかわいー。

あらまわー。

「今日も頑張るか

「うそ、がんばひつね

今日もイゴが可愛い。

可愛いのに優しいって無敵だ。

「今日も頑張るわけ

うん、頑張ってね

今日もアラマキが馬鹿だ。
独りで何かやつている。

「わ、私だつて寂しいんですよ！！ 村長さんと村人さんが畠仕事をしてゐるのを横目に空河の流れを見極めたり、雲の形から魔物を連想したり、外周で訓練するとかもうウンザリです！！」

「動かないで食ひ飯はいついか」

「前に働きたくないでござるつて言つてたよな」

イコと一緒に今日も頑張ろうかと畠に来たときにアラマキが騒ぎだした。

ダメ人間すぎる、勇者なのに。

「もういいです！！『竜殺し』を極めます！！ 究極の竜殺しが知りたって泣き付いてきても知りませんからね！！」

「『竜殺し』は微妙だからこらんなあ」

「『竜殺し』の下位互換だから不必要だもんねえ」

森へと走り去るアラマキを見送つてから薬草を見て回る。そろそろ収穫しても良さそうだがエーテル込めを欠かないようする。

「イロイロと辺が少し足りないみたいだよ」

「どれどれ……ああ、必要だな」

イロと手分けして一つ一つ見て回り、輝きの足りない薬草にエーテルを塗れる。

毎日少しあさず行うことで収穫しても輝きを失うことのない金色の薬草になるのだ。

「やんそろ手紙が来るだろ？」「

「どうだろ？ いつもの間隔なら来る頃だけだ」

同じ作業の繰り返しだがイロとの共同作業なので飽きが来ない。むしろ太陽と薬草の光がイロの美しさを際立たせていて目が幸せ。

「どうあえずアルの手紙で勇者が中央にいるか確認したいんだよな」

「アルの手紙がどこから来たのか分かれば勇者の居場所もわかると思つよ いつもの籠籠なら中央にいるかもしね」

中央のマグと折半しているのだから一人の手紙が同時に来れば未だに居ることになる。

前回も来ていたし、内容は読んでいないが流石に勇者に見放されたとか無いだろう。

「収穫したら耕すだけでいいよな 中央に行くのなら手間懸けられないし」

「そうだね 枯らしちゃうし、枯れなくても使えないもんね」

最初は金色なのだが目を離した隙に緑色になってしまうのだ。
これは役立たずで苦いだけの雑草となり、どれだけ努力しても金色にはならない。

「神様も好まないしな」

「まあ、そうだよね」

ポーションは凄いと聞くし作ってみたいものだ。

魔法薬の分野らしいのだが薬草を使って作れないだろうか。

「どうかシンカイは何をしてるんだろうな」

「なんだろうね 勇者の後ろに国がいるだろ？ 狹いがあるに決まってるよ 怪しいね」

国家転覆や勇者殺とかやつてくれないだろ？
混乱に乗じて狙いやすそうだし。

「わからん」

「わからないね」

迷宮探索とかは流石にないだろ？
ホントにわからん。

「勇者も暇……」

「一人で狩りとか寂しいです…… やっぱり働かせて欲しいわけ

……

「シンカイはわからないけどアラマキは暇人だろ？」

首を傾げるアラマキを見てイロの言葉に同意する。

他の勇者と比べて最も暇な勇者が田の前に立つからだ。

「……頑張れ」

「……頑張つてね」

「応援された！？ やめて！… 私を憐れまないで… うわあ
あああん！！」

イコは美しい。

それでいて優しいのだから非の打ち所が無い。

「わかつたから仕事するぞ とりあえず輝きが薄れてる薬草にホー
テルを込めるんだ 全体に染み込んで行き渡るようにするのがコッ
だな」

「H、Hーテル！？ ホテルを込めるとか異次元すぎるのだけれ
ど… まず違いがわからないわけで」

「ほひ、これだよ」

イコが指差した先に纏つた薬草があり、アラマキが「……よ、よー

し、私だって仕事できるってことを見せ付けてあげますよ」なんて言いながらエーテルを呑めた、たぶん。エーテルを呑められた薬草は黒ずんだかと思うと、ジュワッと音を立ててどろどろに溶けて地面に染みを作った。

「うわあ……」

「ひあっ！？ え、私が悪いの！？」

悪いも何もビリヤッたら一いつなるんだ。
方法を知りたい。

「アラマキはエーテルじゃなくて魔力を出してるんだよ エーテルの放出なんてボクには出来ないし、アラマキにももちろん出来ないよ だから見付ける手伝いしかしてないんだ」

「はあ、エーテルの放出とかユニークスキルみたいなモノですかね」

じいさんと父さんは出来たんだがな。
イコは一緒にいてくれるだけで最高なのに手伝ってくれるとか幸せがある。

「じゃあエーテルが足りてないやつだけ教えろよ」

「むりむり、見分け付かないもん なんですか、エーテルを見分けるって そんな超絶スキル持つて無いわけ……何ですかその目流石にこいつ使えねーとか言わないでしょ? 無理なモノは無理なの」

「こいつ使えねえ。

じこせんも使えたし、父さんも使えたし、俺も使えるし、イコも使えるし普通だろ?」

「常識が、足りない……つ……！ 压倒的な欠如……つ……！ 満ち溢れる非常識……つ……！ 非常識の侵略……つ……！」

「ほら、落ち込んでないで ボクも昔は使えなくて覚えたんだよ 教えてあげるから邪魔しちゃダメだからね」

「イコに教えてもらひとか」褒美すぎる。羨ましい。

「収穫するか 良せそっだし」

「やつだね」

アラマキが修得するまで待っていたら口が天辺に来ていた。
勇者の評価が下降しまくつて困る。

「……もつ田が焼ききれそうなわけで やつと見分けが付いたと思つたらスキル『核識』を修得とか 相手のステを見抜くレアスキルとか修正されても知らないですよ」

「イコは可愛いな」

「ふふ、照れるね」

銀髪を撫でると柔らかくて滑らかな感触にびすっと触つていたくなる。イコの体は暖かいので抱き締めながら撫でたら幸せになれるだろつ。

「……無視にも馴れましたよ いいですよ、村長さんのステ見ます
……見えない、だと!? む、村人さんは……?」

「ボクのを見たら死ぬことになるからね」

「りょ、了解しました……う、せっかく修得した『核識』使い
たいお…… 霊薬のコンディションを見るだけとか宝の持ち腐れだ
お……」

イコの魅力を語り尽くすにはそれこそ一日では事足りない。なぜならピンと立つた大きめの狐耳から足の先まで余すことなく美しいからである。

「村長さん、仕事しないんですかね？」

「ん、ああ ちょっとイコに魅了された」

「ふふ、『魅了』スキルは持っていないよ」

イコが『魅了』を使つたら俺は死ぬ。

目から幸せが逆流して頭が焼ききれるからだ。

「気を取り直して……盛り下がつたな よし、やるか とはいっても収穫は楽だからな 植えるのや水やり、ホテル込めのように汗水垂らす面倒な手順は無いからアラマキでも出来ると思つだ

「なんで私の顔を見たら盛り上がつてしまふからアラマキを見て落ち着いた
わけで 訴えますよ」

イコを見てたら盛り上がつてしまふからアラマキを見て落ち着いた

だけだ。

イコくらい絶世の美女になつたら文句を受け付けてやる。

「わかつたから落ち着け じゃあ説明するが まず薬草が生えてい
る範囲にエーテルを込めた『震脚』を使って浮かせる この時の衝
撃は上向きだからな 次にイコが薬草を手元まで寄せてくれるので
拾いに行かなくて済む ほら、簡単だろ」

力加減が少し難しいくらいだらうか。

『震脚』するに次に植えるときにエーテルの混ざった良質な土にな
つて薬草も金色になるやすい。

「無理」

「役に立たねえな」

「勇者なのにな」

地面踏んで、イコに薬草を引き寄せてもうつて、終わりだ。
難しい事はないだろ」。

「いやいや、無理なものは無理だつてさつき言つたじやないですか
天井はよくないです 不思議そうな顔しないでください わかり

ました つまるところ『震脚』のスキルを持つてないし、エーテルを込めるとかよくわからないし、村人さんが念動力みたいな使つたし、収穫物が消えたしで勘弁してください 私でもわかるほど村長さんの常識がヤバいわけで

「つまりアラマキは無能ってことか

「無能勇者アラマキって妙にしつくづくね

異世界から来たアラマキに常識のことを言われたくない。それに困ったときには聞けば教えてくれるイロとこつ美しくて素敵な女性が俺にはいるのだ。

「馬鹿にされるのがテフオとか悲しそうね……

「なら改善しろよ

今日のアラマキは出来ないとしか言つてない気がする。どうしようもない。

「明日から頑張りつつ頼りながらで

「絶対に頑張らないよね、それ」

「アルファでの生活でアラマキが精神的に壊れたんじゃないだろうか。
そう思わないと可哀想すぎる、頭が。」

「薬草を食べても変わらないから、精神的には問題ないと思つよ」

「やはり頭が可哀想なのか……」

「あれあれ、お一人さん 酷すぎない？ やめて… 私を憐れま
ないで…！ うわあああああん…！」

薬草を収穫。
スキル次第。
無能な勇者。

「手紙が届いた それも一通、な

一通はマグの手紙、上質紙。
もう一通はアルの手紙、高級紙。

「うそ、いい頃合いだね 運命すり感じつかつよ

いつもと変わらぬにこなしてこな。

俺も毎日運命を感じてこます。

「アルの手紙にこれ程まで焦がれたことがあつただろうか……いや、
無い そして今もそんなに期待してない」

「ふふ、無いんだ?」

あるわけが無い。

「イ」の一言一句には恋い焦がれるけれども。

「」の紙質を見るよ 勇者が中央にいる証拠だわ

「うん、いい手触りだし文字も全く滲んでないよ 紙もインクもす
ぐ良いものだね」

いつもなら紙を洗うのだが、今日は手紙本来の役割を果たさせてみ
る。

内容があれだつたら洗うのだが。

「勇者への愛憎で溢れてるな」

「読んだ限りでは勇者が『魅了』を使つて言つたまつがまだ
わかるくらいモテモテだね」

何かする度にモテるらしい。

宿、店、迷宮、遺跡、寂れた村……行く先々に美女がいて、勇者に
惚れるとか呪いだろ。

「同じ勇者でもかなり違うんだな……」

「ふふ、やうだね」

今日こそ竜殺しを極めるわけで、とか言いながら森へと駆けて行つたアラマキを思い出す。

命の武器が見付からなくてヤケクソなのか完全に剣の形では無い物を使うよになつていていた。

「ボクは嫌いじゃないけどね」

「いや、俺だつて嫌いじゃないがな」

やつと村から人がいなくなつたのに、嫌いなやつを村人にはしない。アラマキは馬鹿っぽいがホントに馬鹿ではないと思つし、単身で国を飛び出した氣概は買つている。

「まあ、考え無しのときもあるな あの不安定なまどりにかすべきだが」

「感情を優先するんだらうね 高望みしてないようだし大丈夫だよ

全てを望んではいなこよつだ。

得るために捨てる」ことを知つていて弁えている。……潔あざらのじともあるが。

「相手がどう思つてゐるか、だな」

「そればかりは察するべらじしか出来ないね」

薬草をとつたり、レプリカの話題が出たり、異世界の話をしたりしているときなどに一瞬だが観察するよつた目をしていた。全てが素ではないということか。

「半々、は言こ過ぎだな 七三へらいか」

「ハ二かもしれないよ」

アラマキの馬鹿と素の割合である。七割から八割は馬鹿っぽいと予想。

「警戒されてゐるわけでも無いし、ゆづくつ過ぎ」せば問題ないと思つよ」

「そんなもんか」

「ふふ、馴染んできてるしそんなものなのさ」

イコはどこか嬉しそうに微笑んでいる。
俺はイコが何故いつもここにこしているのか未だにわからず、何度も直通聞いているのだがやはりわからない。

「イコはいつも笑っているな 何故なんだ?」

「イヤかな?」

「そんなわけない 綺麗だし、好きだな」

イコの笑顔は気持ちを感じられるから好きだ。
純粹で優しい好意を。

「ふふ、照れてしまふけど嬉しいね 笑顔なのは……うん、秘密かな ボクだって恥ずかしいことはあるんだよ?」

「ふうん? まあ、イコがそういうのいいか

今回もわからなかつたが、それでも良いのだと思つ。
結局、出逢つたときと変わらずに綺麗な彼女が笑つていられることが俺の幸せだから。

「それにね、君も笑つているんだよ?」

「ん? ああ、そうか 気付かなかつたな……まあ、イコがいるから当たり前だな」

イコがいるから幸せ。

笑つてくれているならもつと幸せ。

「ボクもそう、かな……きっとそうだ 笑つているのは君がいるから ふふ、ボクにとつても当然なんだね」

「イコ?」

何度も頷いて納得したように咳くイコは頬をつぶすらと赤らめて嬉しそうだ。

そんな姿が可愛くもある。

手紙が一通。
マグが一通。
アルが一通。

アラマキが魔物を狩ってきた。

一目見たところでは深い傷は無いが治療の必要があるだろ？

「どうですか！！」「飯とつきましたよ……これで私も役に立つでしょうか？」

「わかつたから薬草食え」

キメ顔でのたまつアラマキの額に薬草の湿布をべしりと貼り付ける。汁をぶっかけてもいいのだが断られるに違いないので傷口に貼り付け、薬草を口に詰め込む。

「むーしゃむーしゃ、んんっ……どうですか、これ、亞龍ですよ！
！『龍殺し』を取得してまで屠ってきたのです！！　褒めてもらつてもかまわないわけで……むしろ褒めてください……」

「うん、凄いね すげいんだけど、猛毒を持つてるから危ないよ」

高揚しながら指差した先には禍々しい形をした死骸が転がっていた。家くらいありそうな巨体を引き摺る苦労をしたアラマキには悪いのだが、イコが言つた通りこいつは猛毒を持つてゐるのだ。

「や、そんなあ…… 見たことないから仕留めてきたのに……」

「見たことないのに食おうとすんな つづかどつ見ても毒をもひつてゐるのにびんびんしてゐるのせびつよ」

腕や頬の一部の皮膚の色が毒々しい黒紫色になつてゐる。アラマキの表情からは毒のダメージを窺い知ることはできない、なぜなら常に絶不調な顔だからだ。

「今日明日くらいは寝てないとダメだよ いくら勇者だからって甘く見るのはよくないからね」

「え、ダメなんですか？ ほら、見てください この魔力、すごいでしょう 大丈夫ですよ もう一匹ノリで仕留められそうですが…… 働かないお荷物なのはなんというか心苦しいわけで」

「ヤマの川つとおつだな 魔力はいにから寝てや

見える範囲の傷に湿布を貼り終える。

細かいところはマタニヒサシで包帯を巻くと止む。

「ベツしてせいか?..

「じつしてもだな

「ただじつでもだな

嫌そうにアラマキが聞いてくるが返答は同じだ。

俺とイロが頷く。

「むむむ……じゃあ、見てください 私の瞳を 滑らかな輝きの
おのれがでる黒は健康の証なわけで」

「じす黒く濁つてどネ」

憎悪の泥の底と表現してもいい輝きが無く、濁つてこの
これでも拾つたときよつせマシだと想えるから凄い。

「濁つて……」

「あと隈がすゞいから寝た方がいいよ」

夜は魔されてこらじしべ、田に田に田の下が黒く染まつてゐる。濁つた黒田と深い隈が暗黒面を作りだしている。

「じゃ、じゃあこのぴちぴちの肌は？ 健康の証なわけで」

「いや、青白くて病人みたいだからな アンデッドのグールとかに間違われかねない」

肌も真っ白だったが、拾つた時から徐々に瑞々しさが失われている。体調を崩していいのが不思議でならない。

「えつとえつと、じゃあ……」

「いいから寝うよ」

「落ち着きなつて 別に追こ出さないから、ね？」

もしゃあつーーと舌がするへりこイロがアラマキの口に薬草を詰め込む。

髪もパサついてるし、煮汁で一時的につるおこを取り戻すりしこが気休めでしかないのだろう。

「まあ、食える部位もあるし苦労したアラマキのためにテキトーに料理してやるよ」

「食用以外にも使い道があるからね アラマキだから素材としても高級だし、何より毒がすごいからね」

亞龍は魔物が進化した姿である竜がさらに進化した龍である。毒も強力に進化しているので使い道は様々だ。

「つー、レベルが上がってしまった 食べて上がるとなんか理不尽…… え、まさか私に毒を盛るとか……」

「ねえよ」

頭を軽く叩く。

中身が入っていないようなポコッといつも氣味よい音がした。

「心配しそうだよ

「そういう環境だったので……」

イコとアラマキを横目に亜龍を影に縫い付ける。

倉庫要らざで非常に便利だ。

「なぜ消えたし」

「ギフトだ 収穫した薬草から加工した品物、農耕具から影に縫い付けられるのがクラスアップ前の効果でな 容量の限界は知らない」

戦闘時のギフトは以前のものがクラスアップした状態で天上の仕様を縫い付けるとかそんな感じで超常の仕様の恩恵を受ける。
前のは影に物を入れる便利な収納空間として扱っていて今も現役だが、『加速』が羨ましくなるのはしょうがないだろう。

「ギフトが本当に便利です 何かあつたら全部ギフトで済ませるレベル」

「まあ、当たつてるよね」

ギフトとは突出した才能が形になったもの、らしい。
目に見える形で神が与えたとか。

「どれくらいの力を発揮できるかは個人の練度次第だけどね」

「私も鍛えようかなあ……」

長くなりそうなのでアラマキを担いで部屋へ向かう。
龍の羽根は取り除いたので文句はないはずだ。

「なんという横暴 自分で歩けるわけで」

「そうだな」

「そうだね」

軽い。

中身が入っていないんじゃないかつてくらい軽い。

「そういえばギフトって一つしか発現しないのか?
やつを見たことが無いんだが」

複数持つてる

「そうだね普通は一つだね でも、例外もいるよ」

機神を頂点とする機人という魔人に分類される種族が一つ持つているらしい。

「どうせ出会い系」とはないだろ？から詳しく聞くかななくてもいいだろ？

「ほら、着いた 大人しく寝ろ」

「やつぱり寝ないとダメ……ですよね わかつてるわけで」

「そつ嫌がらなくとも ほら、包帯巻くからね？」

俺はお茶を淹れるとしよう。

薬草になれなかつた緑の葉を乾燥させた茶葉は少し苦いが後味も悪くないので気に入つてゐる。

「傷はどうだつた？」

「そんなに悪くないし明日も寝てればそれなりに大丈夫だよ

部屋に備え付けられた椅子に座つてゐるイコが答える。

別の部屋から持ってきた椅子に腰かけて茶を啜る。

「これが本物の薬草を使つてこるところべきか…… ところか靈薬とかエリクシルをあんなに食べさせられるとか過保護すぎるわけですか……」

「どうしたアラマキ、毒で頭が悪くなつたのか

「頭は前からだよ 毒が回つてたらむしろよくなつていたかもね

頭の良いアラマキ……？
想像もつかないな。

「いや、なんでもないです というか村入さんはわかつててやつてますよね？」

「ふふ、何がかな

「イロはここに」とアラマキを見つめる。

突貫で屋根を造つたがいい出来ではなかつた。

「なんでもないですよ……寝ますね

「うそ、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

お茶を飲み終えたので大人しく寝るよつだ。

イコが横になつたアラマキに布団をかけている。

「……」

「……」

「……」

金色のお茶もいいが、これも悪くない。

イコもにこにこしながら飲んでるし。

「あの……」

「どうしたのかな あ、もしかして寒かった?」

「イロが甲斐甲斐しく世話をしている。

少し過保護かもしれないが、これくらいがアラマキヒサシヨウビニ
いのかかもしれない。

「あ、ありがとうございます。えっと、毎の仕事しないんですか」

「ああ、しない。簡単な作業だしそうにやらないでもいいだしつ
なんなら明日の朝にでもやっておくか」

「まさに朝飯前だね」

「そうだな。

イロは朝飯前が好きらしい。

「えうですか……」

「まあ、俺といロは看病だな。毒もひつたせつを放置するわけにも
いかないだろ」

「ふふ、そうだね」

油断はよくない。

一日エーテル米を欠かした隙に薬草が縁になるより、気の緩みで取り返しのつかないことになるのは避けるべきだ。

「村長さん、村人さん」

呼ぶ声のまゝに顔を向ける。

アラマキは布団で顔を隠していた。

「……私、アルファから抜け出して良かつた」

「……そうか」

顔を半分だけ出して、ひらひらを見ながらアラマキは言った。
小さい声だった。

「おやすみなさい」

「ああ、おやすみ

「うそ、おやすみ」

僅かな時間で寝息が聞こえてきた。

アラマキを見ながらぼんやりとしててお茶は呑めてしまつたがま
ずことは思わなかつた。

「起つたね」

「ああ」

起きやなこよひのれな声で会話をすすむ。
今もここにいてる。

「安心して起つてほしけ」

「……そうだな」

状態：毒

多種多様に存在し、冒険者を苦しめる。

「まあ……死んでも生き返りそうなアイテムばかりですけどね」

「ちょっとくらいなら死んでも大丈夫だよ？」

蘇生にも限度があるらしいのだ。

試したのだからある程度の時間を超えると障害を持つことになつたり、身体機能が著しく低下するようで完全に引き戻すには死亡した直後が効果的だ。

「神様の好物でもある薬草に隙は無かつたな」

「洗い物の洗剤から蘇生まで万能だもんね 勇者も毒に耐性があるみたいだし」

解毒もこなせる薬草である。

これを更に強化したというのがポーションらしいので中央に行つた際には是非とも見てみたいものだ。

「見せてもらひにましようか 村長さんの畑を耕すつてやつを

「普通だと思うがな」

「アラマキ、もう少し下がらないと危ないよ」

「どうしても見たいと駄々をこねたので椅子を外まで持つてきて、アラマキを座らせたのだがそこまで興味を持たれるのかよくわからな
い。」

寝ていた方がいいと思うが、しょうがない。

「危ないとかいきなり異次元ですね ファンタジー世界に来てイン
フレ展開になるのが農耕とか私の人生がイロモノすぎて言葉にでき
ないです もっとカッコいい感じになると想つてたわけで」

「ほりほり、いいから下がるよ」

イロが椅子を引っ張つて後ろへと下げる。
アラマキは、まあ……いつも通りだ。

「まず鍬を使ひ」

「なんとこゝ神々しわ」

鍬に田分量でエーテルを込める。
多すぎると耕す範囲が拡大しそうで村を半壊させてしまうかもしれ
ないが大丈夫だ。

「で、『震動』で地面を叩く」

輝きが伝搬しながら土の表面が隆起していく。
アルとマグの家があつたところも畑にしたので苗を植えるのが大変
な気がする。

「クワで耕すつてレベルじゃないわけで もうどうしようも無いと
ここまで行つちゃつてます というか鍬を使った意味あるんですか」

「使いなれてる武……農具を使ったほうが調子がいいからだ」

「そうだね 武……農具なら使い慣れてるほうがいいもんね」

使い慣れてれば包丁でアラマキが捕つてきた亞龍を捌いた。
頑張れば包丁で龍殺しができるかもしれない。

「もう武器でいいじゃないですか 篠つてる神氣が異常ですよ マジでここに向かつてゐですか」

「去年くらいに神器になつたんだよ、あの鍬 つまり神クラスの恩恵を得た状態でも全力で武器が使えるつてことだからね」

まな板は斬れないから微妙かもしれない。
さすがに包丁では無理か。

「聖剣・魔剣と鍬が互角に斬り合つとかおかしいと思つたんですよ
でも、薬草にエーテルを与えてレベルアップさせて靈薬のクラス
にまで持つてくるを見せられて、鍬は神器にクラスアップさせてた
とか非常識見たら納得しました 村長さんマジでヤバい」

「料理にもエーテル込めるからね 中央で料理屋をしたら客は全滅
だと思つよ 高濃度のエーテルに充てられて魔毒にもならずにつぶ
するに違ひない 子供だったら料理を目の前にしただけで死ぬかも」

「ヤバいですよ、それ もう少し常識を教えたほうがいいです 怪
我人を見かけて治療したら死んでたとか事件なわけで」

そういうえば鉄で切り裂ける竜って柔らかすぎないのか。
生物だし、柔らかい種類もいるのかもしない。

「やうかなあ……」

「私だってファンタジー初心者なので何かあつたらフォローできま
せんよ というか私も常識が微妙なわけで」

「こりか竜ってどのくらい強いんだかわからん。

魔物の進化って血つながまづビのくらい強い魔物だと進化するんだ。

「……ちよつとずつ勉強していくつか」

「お願ひします 一撃で竜を殺すのが常識とか思つてるのはヤバい
です」

「何の話だ?」

珍しく眉根を寄せて困つてるイロに声をかける。
曖昧に答えるばかりで要領を得ない。

「えっとですね、ええと……あれです……あれあれ、あれですよ
！　！　あれ……！」

「あれ……墓のことか？」

アラマキが指差した方向に手を向ける。
かなり小さいが墓が見えるのでそれのことだろ？。

「そ、そつ　お墓のことだよ　アラマキが話したいことがあるんだ
つて」

「そりやうのか？」

「え……？　それはですね、えっと　はい、そりです」

拳動不審だったアラマキがイコに微笑まれて落ち着いた。
見惚れたのだろう、気持ちはわかる。

「あの墓をですね……」

「墓を？」

「墓を……動かす そり、動かすんです!! ギフトで影に縫い付
ければ称号の範囲も自分を中心としたものになるんじゃないですか
! ?」「

名案だな。

これが通用したら『龍殺し』が廻らなくなるが。

「ちよひと試してみるか

墓に近づく。

アラマキがイコを睨みながら詰め寄つていたがゼリフしたのだろうか。

「お、入った とりあえず遠くまで行つて称号を試してくるか ん
……?」「

シラコキの墓があつた場所に白い剣が埋まつていた。
土に塗れていて薄汚い。

「どうかしたのかな?」

「ああ、なんかこの剣が埋まつててな 父さんが使ってたのに似て
るなと思つて」

「骨とかじやないですかね？」

ねえよ。

汚れているのは鞘だけなので中は綺麗な状態かもしね。

「刀ですね 普通に売ってるのとは違つよつな……」

「カタナ？」

「斬ることを目的にした剣だね 扱うのにも技術が必要だし、力を込めすぎると折れてしまうんだよ」

武器としては纖細すぎる。

俺には鍼があるし使わないだろつ。

「ひょっとギフト試してくる」

「あ、これ調べていいですか『核識』を使ってみたいわけで」

「ボクも興味あるかな」

許可を出して森へ向かう。

とりあえず確認だけなので戦闘する気はない。

「とか言つておこでぶち殺してたりせぬなによな」

眼前には巨大な白狼の死骸が転がっている。

群れを統括していたようでここに一つを仕留めると他のやつらは散つて行つた。

「いい感じ……ん？」

白狼を収納している最中に感じる違和感。

ギフトがいつもと違うような……。

「みたいな」ことがあつた

「良かつたね、ギフト使って」

ギフトの違和感を省いて説明する。
功労者のアラマキを撫でまわす。

「ありがとな

「おおー、なんといつ…… 咄嗟のままかせだつたのに褒められてしまつたわけで もう私のテンションが有頂天ですよ 出会つた人に片つ端からこの喜びを話したい、そして理解できなければ灰塵にしたいわけで 世界が私に従うように戦争を仕向けて滅ぼしたい『魔神の目覚め』でアルファアゴとすべてを焼き尽くすとかどうですか！！ 今なら『煉獄七夜』とか『星降る夜』もセットにしちゃいますよーー！」

「うん、そうだね 落ち着いたらいいんじやないかな

イコに聞いたが古代魔法という種類の滅びた魔法らしい。超上級の魔導師ジョブを持つてるかもしれないとか。

「でまかせ？

「……あ、そうでした この刀ですね、見たところは普通の刀でした

「特別な力も無いみたいだね

返事をして白く磨かれた刀を影に入れる。

墓から出てきたのだから持つていいことある。

「ん……」

「どうやら解放されてない部分があるらしい……どうかしたんで
すか?」

ギフトに違和感を感じた。

見ることができない部分は認証しないといけないとか。

「いや、なんでもない 認証つづりひとつだ?」

「開示されない情報があつてね どうやら条件があるらしいってそれ
を突破すると変化が起きるかもしけないって感じだね」

「それまでは普通の刀ですね」

どんな条件かわからないのでどうしようもない。
とつあえず放置である。

「銘は『白雲』だよ」

「へえ」

「興味ないんですね……」

俺はどうせ刀は使えないのに興味はない。
イコが楽しそうだから持ち歩くけれど。

鍬があれば龍殺しから農耕まで幅広く活用できます。
でもお高いんでしょう?
そんなことはありません、毎日鍬に経験値を貯めてレベルを上げる
だけ……気付くと神器に早変わり!!!
まあ、素敵!!!

「悩むな」

空から落ちてきた龍の死骸を前に考える。
欠けていた部位は修復したので問題なく機能するだろう。

「うん、悩むね」

俺とイコが見つめる先には薬草から加工した品々が並んでいる。
一つ残らず黄金に輝いていて、この世の富を手中にしたかの錯覚を
覚える……と表現するのは大袈裟だらう。

「飴だと弱すぎるんだよな 延命も効かないし」

「龍だからね かなり強力なのを使っても大丈夫だと思つけど」

煮汁やジャムでは劣化が防げない気がする。もっと効果的なモノは……。

「わつじえばアラマキが屠つたやつの逆鱗を煮込んだ物がある」

「曲龍とはいども龍だし、核には十分じゃないかな」

アラマキもいい仕事をする。
家から大鍋を取つてくる。

「二人は何してるんですか

アラマキも着いてきた。

『震脚』の練習をしていたらしい。

「ああ、中央に行くから村の留守番をこいつで雇おうかと思つてな

「龍なら役割を十分に果たせるだらうからね

最初は白狼を使おうとしたのだが、番犬とかしつくづくし。

代わりに龍に乗つて行こうとしたらいつて立場を逆にして運用するのだ。

「中央？」

「ルア・ルカの王都グラウスだよ 国の中心だから中央つて呼んでいるんだ」

「アラマキが行かないで留守番してくれるなら適当に見繕つんだが」

「いや、行きます 行かせてください 荷物持ちから火の番までします ここに一人とか嫌なわけで」

置いて行く気もないのだが。

あと荷物は俺のギフトで持つてくから荷物持ちは必要ない。

「そうか で、アラマキの代わりに留守番係りを龍で造るといふのが核をどうしようかと相談してた

「今は逆鱗のジャム煮で決定したから試すといふだよ

「連れて行つてもらえるだけでうれしいです もう何も言わないわ

けで」

若干だが煤けたようなアラマキを横目に龍の腹にジャム煮をぶち込む。

あとは『核識』で様態を見ながらエーテルを注ぎ込む。

「魔物は楽でいいな 人間と違つて核を埋め込めば問題なく動くし」

「龍は血液の代わりに魔力が大半を占めてるからね 最低限の障害が無い状態で機能が取り戻せるのはありがたいよ」

身体の劣化箇所に魔力を送つて修復する。

ジャム煮も核として機能しているようで送り込んだエーテルや、周囲の魔力を取り込み始めた。

「名前はシャロンにしよう ここは前世よりも強そうだぞ」

「うん、いいと思うよ もつと強くなるように色々いじつてみようか」

「和やかに名前付けてるけどやつてることが理解不能ですからね もう私の常識は死んだ」

『生命創造・偽』のスキルを取得してしまった。

何かやるたびにいろいろ得るから無視することにする。

「魔物つて魔力で身体が構成されてるんだろ 限界まで込めて魔毒の直前で放置して、落ち着いたらまた限界まで込めて、を繰り返して究極を目指すとかどうよ」

「いいね、わくわくしてくるよ」

「ついでにエーテルを『えてレベル上げしましょ』う ワンク上げたら何になるか気になるわけで」

いい感じの改造計画が立ち上がった。

遠い日をしていたアラマキも乗り気である。

「よし、じゅあやむだ 田標はこの紙に描いてある『わたしが考えた最強の龍』だからな」

「さすがアラマキ、考えることが違うね」

「ちょ、黒歴史の公開はやめたげて… 暫だつたから描いてしまつたんです… 悪気はなかったのです…」

アラマキが高級紙にラクガキしていたのを思い出した。もつたないので構想を再利用する。

「遠慮するなよ 僕がおまえの構想を貰えてやるよ 泣いて喜べ」

「紙を無駄にされたからちよつと怒ってるみたいだね 蹄めたほう
がいいよ」

「謝るんで許してください…… マジ勘弁……」

別に怒つて無い。
龍が完成したら許してやる。

「まず5倍以上の大きさにする 一対しかない羽を三対まで増やす
そして頭を三つに増やす 口から黒いプレスを吐かせるようにす
る 尻尾が切れで、自立行動をとる そして最大の難関である神の
ペツトにするところ設定だがこれはどうすればいいんだ」

「難しいね でも難しければ難しいほどに楽しくなつてきちゃうよ

「やめて…… 「みんなさー……」

ちなみに「我に歯向かうのか、人間風情が！！」とこいつセコツも言わせないと云けない。

あと第一、第二形態も用意する必要がある。

「輝きながら「我が眷属の力を見よ！！」と龍を召喚

「召喚術も使うんだ ぐつと難度が上がったね

「（ 。 。 ）アーアーキロナーヴ

耳を塞いでいるアラマキを見ながら更に読み上げる。毒とか持つてゐるらしいので亜龍の毒を使つとする。

「実は本体は地下にいる、と

「どうすればいいのかわからなくなつちやうね

「ああああああああああ

アラマキがのた打ち回つてゐる。

どつでもいいが土で汚れるぞ。

「冗談だ ここいらで完成にしておくか」

「え、冗談？」

「さすがに無理があるからね、さっきのだと」

龍を想像しながら魔力を込めたので思い通りの形になっていた。
とげとげしていて赤黒い外見はまさに龍である。

「なんと禍々しい……」

「足と尻尾が大きくなってるね」

「鱗を重厚にしたらバランスが悪くなると思って足と尻尾を強化し
たついでに羽根を強化したから防御にも役立つだろうな」

発される魔力は以前の比ではない。

これなら勇者が來ても鎧袖一触だらつ。

「墮龍だね 蘇生したから龍種とは言えなくなつたみたいだけど、本質はほとんど変わらないよ」

「ゴードンモンスターですね もう好きにしたいいわけで」

金色に輝く瞳がカッコいい。

俺の感性に任せて正解だった。

「ああ、かわいいだろ」

「うん、かわいいね」

「……」

ぐるぐる、なんて喉を鳴らして甘えてくるのだ。

性格は温厚で真面目とみた。

「次は白狼を蘇生だな」

「核はどうじょうつか ジャムでいいかな」

「ええー……まだやるんですか」

せつかくなので亞龍の素材で強化する」といひ。「やるなら完璧を田指すべきである。

「アラマキだつて四足歩行する魔物に騎乗したいつて書つてただろ」

「ファンタジーに来たら狼に乗りたいつて書つてたよね」

「はい、書いました 常識をちょっと捨ててきまわ」

狼に羽根は合わないな。

牙とか爪だけ移植するか。

「中身も変えたらいいんじゃないかな 亞龍のほうが強靭だから魔力やエーテルも込めやすいよ」

「なるほど、中身か ついでにプレスとか吐けるよ! こするか」

「逆に龍の内臓を追加しまじょう 上手く機能すれば圧倒的な力が手に入りますよ」

イ』とアラマキの意見を取り入れながら改造する。改造を終えるとなぜか称号『ファウストの狂氣』を取得してしまった。

村長の楽しい生命創造!!

用意するもの

・龍

カロフ

一匹

・亞龍の逆鱗（ハイドラの派生体）

・

ジャム（大エリクシル）

・

スキル（生命創造・偽）

・

才能

手順

- 1・逆鱗をジャムで一晩煮込む
- 2・煮込んで出来上がった月夜の水を核として龍に移植
- 3・不具合を確認しながらエーテルと魔力を送る
- 4・完成

堕龍への派生はお好みで

「乗り心地は微妙だな」

「移動速度は速いけど障害物を避けるからね 動きに緩急があつて
ちょっと大変だね」

亞龍の機能をふんだんに取り入れた白狼の背に乗りながら会話する。白狼の名前はエリス、特徴は無いが強いて言つならやはりすざめて亞龍になってしまったことだな。

「なぜそんな余裕なのか私にはわからない 今すぐこでも振り落とされる自身があります」

「空から落しておいてどうなんだ」

「落トは力入れなくてもいいけど、しがみ付く場合は力が必要だから大変……とか？」

「なるほど……そう、なのか？」

咥えて運んでもらえれば解決するんじゃないだろうか。

「アラマキ、食われる」

「こきなり死ねと？ なぜだし」

「間違えた 噛まれる」

「結局死にます 勇者だって生身なわけで」

「名案だと思つたんだが。

アラマキの丈夫さに賭けたところとか。

「それいいかもしねないね 噛み砕いて胃で運搬して、着いたら蘇

生とかどう? あ、でもこれじゃ元通りにならないね 死んでから数分経つたらアメで蘇生、そしてすぐ死ぬ、数分で蘇生、を目的地まで繰り返せばいいのかな」

「鬼ですか、あなたたちは 人道に真っ向から反します」

「鬼って見たことないな、そういうえば」

魔人の一種らしい。

ヒトと非友好的な種族が魔人だとか。

「あ、私もです やっぱりお酒とか沢山呑むんですかね」

「どうかな お酒は好きらしいけど闘つのも好きな種族だしね」

「酒呑みで戦闘が好きって醉っ払いじゃねえか」

絡まれたら全力で逃げる。

俺は酒が好きではないし、イコも好きじゃないのでアラマキを囮にしようかと思ったが酒を無理矢理呑ませれる苦痛はわかるので囮はやめてやることにしよう。

「鬼に直接言つたらダメですよ」

「会つ機会ないだろ」

「アラマキが勇者だし、出会つかもしれないね」

なんという迷惑。

アラマキを捨てて行こうか。

「まだ森抜けないんですか これ以上揺れると落ちます」

「気張れ 落ちたら置いて行くからな」

「そろそろ抜けると思つよ」

ときどき襲い掛かってくる魔物に石を投げつけて撃破する。

『魔弾』スキルは伊達じやない。

「あ、障壁で防がれましたね 竜種でも強いんじゃないですか」

「結構魔力を込めたんだが防がれたか」

「石は魔力が通りにくいからね 攻撃と防御の圧力に耐えられなかつたのかも」

直接攻撃したほうがいいかもしれない。
ギフトを憑けて……。

Now Loading……

「なんか遅いな……」

L	V
H	P
M	P
S	T
R	
V	I
I	T
A	G
G	I
D	E
E	X
I	N
N	T

判定・失敗
判定・失敗

「失敗した」

【『
。『 の憑依に失敗しました。』】

「え？ 失敗なんて初めてだね 大丈夫？ はない？ 体調悪かつたら言つてね？」

「ん、体調は大丈夫だ
頗る健康つてやつ
ただギフトが全く上手
くいかない」

RETRY

【 】
・
△
の憑依に失敗しました。】

° R E T R Y

R E T R Y

【 】
『 の憑依に失敗しました。 】

- 10 -

連続アクセス規制中です。

連続アクセス規制中です。

「ダメだな、絶不調つてやつか バグつてたりすんのかな」

「バグつて……どこも悪そうに見えないですけどね ちょっと『核識』で診てあげますよ うわあ……文字化けしてるわけで」

「俺の中身が文字化けとか対処法がわからん。

とりあえず薬草を食べようと思ったがギフトが働かない。

「ギフトがさぼつてやがる

「原因がわからないし困ったね

ギフトも『縫』の状態である。

大人しく裁縫をしてろつてことだらうか。

「あの竜どうしますか 魔法の効きが悪そうなので出来れば無視したいわけで」

「ボクがやるよ でも魔法である程度の誘導はしてね? 真っ直ぐでしか必殺できないから」

「俺は見てるからがんばれ」

アラマキが黒い球を射出して追跡していく竜の行動範囲を狭める。
イコはかわいい。

「よこしょりと」

「え？ あつ、避けられましたーー！」

イコが憑きだした右手の先の空氣が歪み、黒い砂を撒き散らしながら一直線に竜へと向かう。
竜は腕を斬り飛ばされながらも回避して向かってくる。

「じりじりつか あ、振ればいいのか」

避けられて困っていたイコが思いついたように腕を振り下ろす。
真つ一つに分かれた竜の死骸が墜落し、次第にその影は遠退いていった。

「ええと、何をやつたのじりつか」

「ギフトで向こうまで分解したって感じかな
直線だし、速度も遅
いけど魔力分解してるし切れ味は抜群だね」

ギフトの範囲を伸ばして攻撃したらいい。
イコのギフトも便利そうで羨ましい。

「非常識が私を責めたてるの ねえ、エリス 私はどうしたらいい
の？」

「首元にしがみつくなよ エリスが嫌がってるだろ」

狼としては臣体のエリスだが、首元にしがみ付かれるのは嫌いらしい。
首を左右にふつて落とそうとしている。

「エリスにも見放されて私ってば可哀相……」

「頭が？」

「うん、頭だね」

可哀相な頭に定評のあるアラマキ。

れかである。

前回までのあらすじ

アラマキが肉塊になつて中央へ行く決意をした。

「私、お荷物ですからね お荷物はお荷物らしく運搬されてみせますよ……」

固く握りしめていた手は震えていた。

飴が溶けるや、その一言を俺はかけられずにいたのだつた。

……嘘です

「外周……後ろに広がつてゐる森のこと、を抜けたらあとは平穏だから 竜クラスにまで成長した魔物はわざわざ雑魚を狩りに外に出ないからね 経験値の足しにもならないし」

「隣村はここら辺だな」

昔はここまで来るまで物凄く大変だつた氣がする。

ギフトの範囲外だったので魔物が現れたら石を投げつけて追い払つて逃げてた。

「あの雨が局地的に降つてるとこだよ 未だにマグの魔力があるらしいね」

「まだ降つてんのか 水没してんやな

遠巻きに見てるが凄まじい豪雨だ。
マグの魔力が洗い流せてないらしい。

「詳しく説明してくださいよ 私だけ「うわあ、すごいあめだね！
！」としか言えないわけで」

「いや、俺も凄い雨としか言えないが 隣人だつたやつが呪われた
らしく」

「スキュレイを討伐したらしくてね 魔力が呪われたんじゃないか
なって」

「ひちは晴れてるのに向こうだけすごいことになつてて
荒ぶる泥水を見ていたら村があつたなんて信じられない。

「呪術を使う竜ですよね呪われるとあんなことになるんですか?
マジですか？」

「中央も雨が降つてるかもしねないね」

「マグの拠点だしパーティもいるので雨は間違いなく降っているだろう。

雨季とかそういうのを軽々と越えている気がするが。

「解呪してないんですかね」

「竜の呪いだしね 経験値として取り込んだのが未だに呪いを発揮しているのかも」

「竜つてこわいんだな」

できるだけ注意することにしようと。

魔物と竜の違いってあまりわからんが。

「……村長さんは心配しなくてもいいんじゃないかなあと」

「そうか?」

イコがいるから大丈夫ってことだらうか。

アラマキがまともな事を言つとか雨が降るかもしれない。

「ああ、降つてたか」

「え、何がですか？」

「たぶん、アラマキの血の雨かな？」

「なにそれこわい

血の雨によってアラマキが感染。

大量発生したアラマキによる世界滅亡「こいつ未曾有の大事件だ。

「やめとけ アラマキの血の雨とか誰が得するんだ」

「うそ、そりだね」

「なんか悲しい 死を回避したのに虚無感しかないわけで」

「びり付いたら落ちなそしだし出血は控えてほしい。
大地の頑固な汚れになりそうだ。」

「もういいです 私はエリスをもふもふして楽しめます」

「じゃあ、俺はイ」「な

「ふふ、恥ずかしいよ」

月明かりのように穢やかに輝いている尻尾をもふもふ。太陽の下で月を手にしたかのよつた贅沢に俺の心が満たされる。

「こんな狭い場所で桃色空間を開拓するのはやめたまえよーー！ 高速移動中なのに嫉妬で死にたくなるじゃないですかーー！ こんな身投げに最適な場所でそれはいけないーー！」

「エリスに齧られてれば身投げしなくて済むけどな」

「煮汁をかけ続けて治つて傷ついて、を繰り返すとか

アラマキが身投げせずに苦しみ続ける方法を考える。考えながらも尻尾をもふもふするのは忘れない。

「こいつそ龍の核にしてしまおうとか

「動力源、つまり勇者エンジン……いや、アラマキエンジンだな

『わたしが考えた最強の龍』の中核になれるだ

「もつやめて…… 私だって生きてるのよ…… 過去のことをじ
めるなんてよくないです……」

最強の龍の一部に自分がなるとかすごいこと思つんだが。
アラマキがなりたいって言つたら全力でサポートするつもりだった。

「ふふ、確かにアラマキも生きてるもんね」

「イコセニ……」

わかつてくれたんですね、みたいな救われた目で見つめているアラ
マキ。
尻尾を撫でる手を止めるし、寂しそうに擦り寄つてへんその可憐さ
に昇天しそうです。

「でもね、生きてるから苦しめるんだよ?」

「神は死んだ……」

いや、神は死ないだろ。

設定でステータスは決まっているが本物は生死の概念、といつも
HPがあることすら怪しいのに殺せるとは思えない。

「遠出でせしゃぐのはいにけど落ち着けよ」

「うそ、ちょっと騒がしいかな」

「あ、はい すみません でもこのタイミングで素に戻るのはある
いと思つわけで」

森から出ると魔物を見かけなくなつた。
見かけても動きが鈍重すぎてエリスに踏まれて肉塊になつていた。

「魔物つて少ないんだな」

「森の狂つたエンカウント率を基準にしないでください 竜と遭遇
とか国を挙げての大事件ですからね ちょっと歩いたら龍がそこいら
辺にいるとかおどぎ話ですよ」

竜籠もあるんだからそれほどのことでもないだらつ。
竜籠の竜は養殖品つて聞いたし、天然物より弱いのかも知れない。

「へえ」

「興味ないんですね わかつてましたよ」

「冒険者が狩っちゃうから竜に至るまで生存できなかつたり、格上と戦つて勝つような普通とは程遠い生き方をしないとなれないからね」

魔物にも才能があるのかもしれない。

成長速度や勘、運、向上心といった感じのものが。

「違ひがわからなくとも大丈夫だよ……たぶん」

「たぶんじゃダメなんじゃ…… 村長さんが『まぐれ』に迷宮入った
らどうするんですか 攻略するならまだしも破壊しそうですよ」

「ねえよ」

なんて失礼な」とを言つのだらうか。
迷宮に入つてそんな余裕なわけないだろ、半分も攻略できていつて聞くし。

「いや、やりかねません 近道と称して通路を碎いて進み、行き止まりに当たつたら地面を掘り進むとか といつか迷宮の閉鎖空間で村長さんのギフトを使つとか火力がヤバい」

「いきなり空から降つてきて家を壊すやつがよく言えるよな」

「龍もおまけだつたね」

空から龍とともに落ちてきた勇者とか迷惑すぎる。
シンカイが村に来たときに魔物に襲われて「くつ、なんてレベルなんだ……こには俺に任せろ……！」みたいなことを言って泥仕合をしてたけど、原因は魔力を撒き散らして引き寄せたあいつにあると思つ。

「アラマキつて『遮断』系のスキルないのか」

「そうだね、魔力を流しつばなしにするのはよくないよ 魔物を引き寄せてしまつからね」

「え？」

勇者だから魔力も膨大だが、垂れ流しはよくないと思つ。
弱い魔物なら近づかないが強い魔物は誘われたように襲つてくるか

だ。じ

「なんですかね、それは？」

「アラマキ……」

「無能勇者の名が広がるまではそこまで遠いことでもなきだね」

魔力操作はできていたので『遮断』もすぐこ覚えだらう。中央に着くまでに修得するのがアラマキの課題になつた。

アラマキの血の雨。
アラマキエンジン。
無能勇者アラマキ。

王都グラウス。

なんか伝承があるらしいが俺は知らないので省略。

「どう入ればいいんだ？」

遠くに見えるグラウスの入り方を聞いてみる。
エリスに乗つたまま突撃してもいいのだろうか。

「Hリスは影にしまつたほうがいいね 何らかのギフトで龍だとば
れたら嘘だになるよ

「謠うとか騎士団やギルドの超上級が全力で駆けつけますよ…
… あんなに遠いのに徒歩で安心してしまったとか私も疲れている
のですね……」

エリスを影に縫い付ける。

ギフトの調子が微妙だが一応は機能しているようだ。

「『遮断』でやるようになつて良かつたな」

「飲み込みの早さはさすが勇者つて感じだつたね」

「え、そうですか もっと褒めたら伸びますよ 褒められて伸びるタイプなわけで」

「いつもみたいに役に立たないところがすごいこと思つ 無能とも勇者の中では際立つていて追随を許さないに違いない なぜ生きていられるのか、その勇気がすでに勇者の証としか思えない可哀相な存在歩いていて恥ずかしくないのだろうか 田代覚めることに罪悪感を抱かないのだろうか すごいぞアラマキ、世界中でおまえよりもダメなやつはいないだろう」

「……死にたい 縮んで無になりたい」

「褒めてないよ、それ」

褒めたつもりだったが、違つたらしい。

落ち込んでいるアラマキを無視して進むこととする。

「褒めるのって難しいな」

「ふふ、
そうかもね」

「あ、ここへ歩いてこなさい」と歩いてくるイーハは歩幅が狭いので俺がゆっく歩いて合わせた。

まさかこの可愛らしさも間違つてことか……せ、イーハの事だから可愛いに決まつて。

「アラマキが襲われてるな
すごい数の魔物だ！」

「『遮断』し過ぎたのかも 感じられる魔力の強さが中間くらいになつてゐるから経験値を求めている魔物が狩ろうとしている、かな」
アラマキが剣を振り回すと魔物が片つ端からばうばう!……剣?
どう見ても剣じゃないんだが。

「置いて行くなんてひどいですよーー！」

「…ちくんな魔物が来るだろ？」「

「うん、たくさん来たね」

魔物つて強いんだろ、やべえ。

村の周りにいるやつらくらい強いつて商人を護衛してた冒険者も言つてたしひギフトを……とか思つてたら鳴き声がつるせえ、石投げつけてやんよ。

「やわらかっ 弾けて貫通したぞ」

「竜を強さの基準にするなど言つたいわけで まあ、無理でしちうね……」

ちょっと面白くなつてきた。

投げた石の射線上にいた魔物がぱらぱらになつていいくとか愉快だ。

「ここつらがスライムつてやつか 濃く柔らかい液状の魔物つて聞いた」

「スライムは石が当たつた瞬間に蒸発しちやつた魔物だよ 今弾け飛んだのはガーボイルBとマンティコアだよ いろんな魔物が引き寄せられてるんだね こりら辺にいない魔物も多いみたいだし」

ちゃんと見てなかつた。

スライムを見たこと無いからじつくり観察したかつたんだが。

「そんなスライムとかどうでもいいじゃないですか 他に気になることあるでしょ? ほら、私の武器とか」

「いや、スライム馬鹿にすんなよ 液状で核が見えるのに防御手段を持つてないとか凄すぎるだろ 鎧や鱗が無いのに障壁まで張らない 溶解液や毒に体を変化させようとも一切の外骨格を纏わないとか野生で生きられる気がしない 完全に虚弱なのにランクが上がりつても無防備とか男らしい 攻撃は相手を飲み込むだけでブレスや魔法を使わないという近接特化なのになぜか防御を捨てている これ以上に気になることなんてねえだろ」

捕えた獲物を体内で溶かすのだが時間がかかりすぎて、襲われたときに逃げられないとかすごい。

むしろその柔らかさを活かして物理攻撃のダメージを軽減させてい

るという潔さ。

「あ、はい すみません」

「ふふ、外周だと竜種の高等な魔物ばかりだから楽しいんだううね 障壁を使う魔物が彼の普通だから」

わざとらしい脆さ。

こいつらは低級の、E……いや、F級とかいう魔物だな、間違いない。

「あ、溶けた」

「魔力を解放したらダメだよ 中でられて融解しちゃうからね」

「何もかも間違っているのに正せない……つー！ 恐るべき非常識
……つー！ 全ての冒険者をあざ笑うかのような暴力、……つー！
これが圧倒的な力……つー！」

何かに使えるかと影に入れて置こうかと思つたがやめる。
まだ生きている魔物は素材に適さないし、治療する気も無いからだ。

「外はいいな 何もかもが新鮮だ」

「そうだね ボクは村も好きだけど」

「私も新鮮です スライム蒸発させてガーゴイルに石をぶつけて粉
砕するなんて貴重すぎて涙が出るわけで」

機会があればスライムをじっくり見てみたい。

衝撃を和らげる軟体と靄の様に消えるスライム、砕けた岩のようにならバラバラになり静かに擬態するガーゴイルB、肉塊として散ったマントティコア……最後は違うが、どれも防御に難があるがめげずに逆に柔らかな身体を活かして生きようとする強かさと強靭な生命力に触れた気がする。

「魔物は奥が深いな 迷宮とかこれより強くて凄いんだろ……冒険者はす」「いんだな」

「村人さん、ヤバいですよ ホントにヤバいです 何がヤバいって、ヤバいことがヤバいんですよ ヤバすぎてどうすればいいかわからぬヤバさなわけで ヤバい、ヤバすぎる、超ヤバいの三段階に分けたら確實に超ヤバいですよ」

「うん、ちゅうやばいね ボクでも困つちやうよ」

迷宮に入つたら村に落ちてきた龍よりも強いのがじろじろしているに違いない。
それを相手にする冒険者とか凄すぎる。

「龍よりも強い龍を討伐とかマグも凄いんだな……」

「マグつてあれですか 隣人で雨の原因つて人ですかね なんです

か龍より強い竜って 僕はスーパー・ドラゴン……意味は自分で考えろ、みたいなやつですか」

「うん、その隣人で合ってるよ グラウスで探索者をやつてるんだつて スキュレイを討伐したって前に手紙で書いてあつた人 变に勘違いしてるのかも」

「負のスパイラルですね 外周にいたらスキュレイくらいの竜はごろごろしてるじゃないですか 下級の竜を石で致命傷を負わせる村長さんに討伐を知らせるとか恥ずかしいくらいですよ もつと……いや、いいです もう私はどうすればいいのかわからないわけで」

S級は化け物つて聞いたし、神クラスを憑けても大丈夫に違いない。全力で攻撃してみたい。

「……うん、後で考えようか グラウスに入ろうよ」

「問題の先送りですか…… そうですね、なんか疲れたわけで 行きましょう」

スライム。

しゅ『』いつー！

俺は絶望した。

自分の常識、知識、そして世界……すべてが否定されたかのようだ
った。

「くそつ……！」

全てを失ったかの虚無感。

心のどこかで認めてしまい、裏切ってしまったような罪悪感。

「くそ……！」

今まで供に歩んできた相棒を否定することになる事実。

現実はいつだって身勝手だ。

「くそお……」

俺は何も求めていない。

ただ、信じていただけなのに。

「俺は、無力だ……」

すまない。

俺は君に、謝ることしか出来ない……本当にすまない。

「何やつてるんですかね、村長さん」

「本物の薬草を教えてあげたんだけど……」

金色に輝く粉をあんな萎びた葉っぱと勘違いしていたなんて……。
俺の罪は重い……。

「ああ、私が説明したら「粗悪品を薬草と騙るなっ！」「とか言って塵にしたので諦めたんですけどさすが村人さんですね」

「うん、そつなんだけど……ちょっと悪いことしたかなって もつと早く教えておけばよかつたかもね」

じこやんや父さんが薬草つて呼んでいたから俺も呼んでいた。
つまり俺に非はない。

「明日からもおまえは変わりず薬草だ」

「なんか解決したみたいで

「ふふ、やうだね 安心したよ

なんだよ靈薬つて。

薬草のくせに気取りやがつて。

「まあ、まだいろいろと問題は残つてるわけで

「うふ、困ったね」

そういえばアラマキが剣の代わりに振り回していたモノを聞いてみよ。

薬草は美味しいだきました。

「アラマキが使つてた武器つてなんなんだ？ 剣とは違つた気がしたんだが

「あ、気になります？ どうしても聞きたいって言われたら教えちゃうわけで」

「イロ、ちょっと街見たいんだけど一緒に行かないか？」

宿の窓から見える街中は賑わっていて興味をひくものがある。アラマキの話を聞くよりもイロと歩いたほうが楽しくに決まっている。

「冗談ですよ！… お願いですから話を聞いてください…
村から武器の事をスルーされていて寂しかったんですね！… 武器を自慢させてください…」

イロがアラマキの姿勢を褒めている。

ドゲザとこうりしげが俺も思わず息を飲んでしまった。

「……冗談だ 聞いてやるから落ち着け」

「女の子がそつこつ格好をするものじゃないよ？」

「ありがとウザります…！ なんか負けた気がするけど嬉しいで

す！！

思わずアラマキの頭に足を置きたくなつてしまつた。
凄いモノを垣間見た……。

「氣を取り直して、武器はこれにしました」

「じゃーん！！なんて言いながら取り出したのは……。

……？

「……槍、とか？」

「……傘ですよ、ビニール傘」

「これははすゞいよ 表面がつるつるしていくて普通の傘よりも水をはじきそうだし、魔素を取り込んで魔力を発しているからこの傘で精製された魔力を受け取ることもできそうだね かなり高等な強化が施されているから強力でしかも魔力の通りもいい」

傘ってこんな見た目だつただろ？
イコが興味深そうに眺めている。

「村人さん、この凄さがわかるんですか!? ただの装飾品のインテリアを鍛冶職のよつこちやんに鍛え続けてもらつたんですよ!! まさに究極の一!! 積み重ねた素材と時間は贅沢を超えて無駄の域にまで達して完成させたのです!! ただのビニール傘が聖剣や魔剣に勝るとも劣らない性能に!!」

なんかすごい傘らしい。

聖剣・魔剣と張り合えるとか。

「いや、効むよ」

「もうがっかりですよ!! 聖剣至上主義には呆れて物も言えません!!」

「おまえも聖剣を持つてるけどな」

またもや聖剣が私の障害に!!とか叫んでるアラマキを無視してビール傘とやらを眺める。

軽くて長さもアラマキの体格にはちよつといいのだろう、ついでに魔力の通りはかなり滑らかだ。

「聖剣や魔剣と競り合つたら一発でやられちゃうね 格が足りな過ぎるから圧されて折れるよ むしろ内包している格でここまで強力にしたのだするとアラマキの友達の腕はかなりのモノだね」

「なんだ、友達が凄いのか」

「よつこちゃんSUGEEEEEEEEE」

よつこちゃんという友達が凄いらしい。
竜殺しマドラー や破魔スプーンなどを手懸け、剣は一切鍛えないと
か。

「エーテル鉱石がもつと手に入れば……」

「まあ、そう落ち込むなよ

「エーテルを鍬に込めて強化するような勿体ない人に慰められると
か 素材集めをせずに強化する村長さんが憎い」

なぜだし。

ビール傘にも込めて欲しいのだろうか、丈夫になるし。

「まあ、でも外装の強化に比べて内包している格は低いけどとも
いい出来だよ 上位の剣よりもずっと強力だね 使つていれば経験
値を取り込んでそのうち格が上がるよ」

「あ、ありがとうございます 漢剣を片手にがんばります」

剣じゃねえけどな。

斬れないだろ? 、刺すのか……振り回して使ってた気がするが。

「ちなみに名前は白染なわけで」

「いや、半透明だろ」

名前負けしてると思つ。

そのままビール傘でいいだろ。

「なんならスケ郎とかどうだ」

「なにそのスケベなうな名前 勘弁してください」

「透け紳士とかどう? 滑稽で似合つてない?」

「やめたげでーーー。」

村長の脳内

冒険者「村周辺より離れると魔物が強くなり、迷宮に出現する魔物は凄く強い」

魔物 弱い 竜 強い 龍 強い 迷宮の魔物強い

つまり、魔物く竜く龍く迷宮の魔物（・・・・）キリッ
「種族、国、スキル、ギフト、魔物、冒険者、ギルド、クエスト、アイテム、そしてシステム……。これ以外にも世界には多くの物事であふれているんだ。説明しなければならないことは多く、教えていることは少ないよね。だから今日は魔法を教えようかなって思つたんだよ」

「使えないんだが覚える必要あるのか？」

「うん、もちろん 知識があるだけでもかなり違うよ マグも、といつか村で生まれた若者は総じて世間知らずだから外に出た場合は四苦八苦しているんじゃないかな」

魔法を使えないんだよな、俺。

魔法を伝える器官がまるつきり無いとかイコが言つっていた。

「魔法の知識はあったほうがいいですよ 戦闘で襲われたとき魔法を使わいたらどうするんですか」

「石を投げつける」

「……マジでやりそっだから困る そして発生した魔法を破壊しそうです 魔導師も研鑽を積んだ努力の結晶を道端の石ころで対処される日が来るなんて夢にも思わないわけで」

『魔弾』スキルを持つてるから通常攻撃と同じ命中率で持ち上げられるモノならどんなモノでも投擲武器に出来る。
だが上位の冒険者が相手だつたら厳しいかもしだい、やつらは化け物らしいし。

「じゃあ、防がれたらどうするのかな？ この前みたく障壁や防御系のスキルで」

「それはどうしようもないな 逃げる、とか？」

「……なんですか、そのガチムチ魔導師 あの石の威力を前にした
ら障壁とか紙屑ですよ 防御系スキルなんて『見切り』があるかどうか
あの石を防ぐとか前衛職でも一部でしょう なぜ未だに街中

で平穏に過ごせているかわからないわけで

走つて逃げ切れるのか。

魔力を撒き散らして輝く魔導師に追いかけられたら俺は死ぬかもしれん。

「逃げ切れなかつた場合は戦うしかないでしょ？ その時にどんな魔法を使つてゐるかわかるだけでも有利になるよ 使える属性、信仰、どれくらいのランクの魔法が使えるか、魔力の上限をわかるだけで戦いが楽になるね」

「なるほど」

「……エーテル解放か魔力解放で倒せますね 廃核か廃魔を防いでガス欠して死ぬわけで えげつないです」

ほとんどの情報は『核識』でわかるので知識を得ておけば勝機を見いだせる。
つまりそういうことなのだろう。

「魔法も国や場所によつて異なり、種類も様々だから一般的なモノを説明していこうか 魔法は魔法スキルに分類されていて、大きくわけると詠唱魔法と陣魔法の一いつだね」

「大まかに詠唱・祈祷・呪術の詠唱型、円陣・紋様・転記の陣型として種類わけができます。魔法としてよく知られているのは詠唱型ですね。これは呪文を唱えて魔力を信仰先に渡せば現象が発生します。陣型は魔力を込めた文字や図形を描くことで詠唱と同じく現象を発生させます」

詠唱は独り言を発して魔法を発動、陣はお絵描きして魔法を発動ということか。

神経質な仲間に怒られたりしないのだろうか……「遊ぶなー！」S級スライムに溶かされるぞ……」みたいな。

「うん、そうだね。それで魔法の属性は信仰する妖精によって変わるものだよ。雨妖精だつたら水、炎妖精だつたら火といった感じだね。火が第一、水が第二、土が第三、風が第四元素、という感じに属性が分かれているよ。魔法や信仰の形は様々だけど、魔力を差し出して現象を引き起こすのは共通している事柄だね」

「神様は信仰していないのか？」

「できるけどほとんどしてないと思うよ。威力は高いけど、膨大な魔力とエーテルを犠牲にするからね。第五元素魔法を使うのは暇を持て余すほど稀有な才能を持っている魔導師が、かなりの物好きくらいいだよ」

「私は全部の属性が使えるので第五もいけますよーー！」

アラマキが稀有な才能……？

いや、暇を持て余す物好きだろう。

「詠唱型は似てるようなものだけど、結構違うんだよ 詠唱は声に出すからいろいろと判断がつくけど、祈祷は念じるから見た目ではどんな魔法か判断がしにくいんだ 呪術は術者が全く動かなくなつたら発動するから慎重に見極めれば大丈夫……かな？」

「陣型はわかりやすかもですね 円陣は魔導師の足元に展開された円陣内に書かれた文字を、紋様は術者が描いた記号で判断します 転記は魔導書などの魔導具に魔力を込めたら発動するので早くて厄介ですけど一冊に書いてある魔法の種類は少ないので臨機応変にしてとこうですね」

多いな……。

といふか準備されたら詰むような気がする。

「魔法を使ってくる敵と経験を積むのが一番の対処法だけね」

「戦わないのが一番だろ、魔法つて怖いし 村にいたときに金色に輝く泡みたいなのが使われたけど死ぬかと思った 神様ありがとう

「……今となつては村長さんに常識を説くのが間違いなのではないかと私は思うのです 何と戦つたか知りませんけど『エンジェル・ソング』とか普通は龍も死にます『天使』級はマジでヤバい」

黒い羽根が生えた皮膚が黒ずんで爛れた翼人……いや、村にいた翼人たちとは違うもつとおぞましい何かだつた。

そのときは神級が憑いて黒いやつの中魔が脅威にならずにすぐ戦闘は終わつたが、イコから

一日中離れずに一緒に寝たのを覚えている。

「使える人はいないと思つけど……あ、アラマキが使えたね 魔法の原型とも言える

神代術……つまり古代魔法だね 天地開闢から始まる神話を再現する魔法で、天使の召喚や神の一部を顯現できるモノもあるらしいけど 必要な技術が今では失われてゐるし、魔力も膨大でヒトには扱えない術だよ 発動すらできない奇跡の領域だね」

「私つかえますよ!! 見たいですか!! なら王城を火の海にしきりますけど!! むしろさせてください!! 偉い奴らなんてみんな死ね!! 私を利用しようとしたやつらも貴族もみんなみんな死ね!! これから毎日城をバーベキューしますね!! BBQ!!

「BBQ!!」

「誰だよ、アラマキを勇者にしたの 危ないだろ」

アラマキは落ち着きがないやつだ。
びーびーきゅーとか全くわけがわからない。

「ほら、落ち着けよ

「ゅうくつ呼吸しながら ほら、ね？ 吸つて、吐いて、吸つて……」

「B B……あ、はい すー、はー、すー……」

俺とイコドアラマキを挟むように両側に座る。
高笑いを挙げながら完全に濁っていた田に若干だが光が戻る。

「吸つて、吐いて」

「すー、はー」

「吸つて、吸つて、吸つて、吸つて、吸つて、吸つて」

「すー、すー、すー、すー、すー……」

「」は息を吸こ過ぎてむせる場面だらう。

さすがアリマキ、鷹者は伊達じやなことこのじよとか……。

「ふううううううう…… あのですね、村廻さん。」

「こせ、落ち着いたなからこだろ

ジ田で見つめるアリマキから田を逸げす。
イ田せうじて樂しそひだ。

「まあ、いいですか？」

「じやあ、いいだろ

「いいのかな？」

いい？
いい？

「いい？」

「……？」

「……？」

「……」言っていたが、バカっぽこのに躊躇してやめる。異様な光景だったが、宿の一室なので問題ない……たぶん。

「……」言ひのせやめゆか……

「ふふ、ボクは楽しかったけどね」

楽しかったのか……。

まあ、イゴが楽しかったのならあと三日へりこ続けてもいいのだが。

「じゃあ、まだやるか? 三日へりこ

「なんとこか? スマーク もひやめましちゃうよ……」

「うそ、終わりでいいよ」

終わりになつた。

終わるって言うのか、これ。

「ところでイコが使ってた魔法ってなんだ？」

「ボクの？」

詠唱しているところを見たことがない。

しかし、陣や魔導具を使っているところも見たことが無い。

「そう、イコの魔法 祈祷とか？」

「ボクは祈らないよ あ、でも君のためなら神にも祈るけどね」

「イコ……」

なんという可憐な微笑み……。

惚れ直した、俺くらいになると惚れ直し回数は余裕で千を超えてる。

「まあ、詳しく述べと魔力を使って現象を引き寄せてるんだよ」

「村人は機人……」

蹴り飛ばされてアラマキが外に吹っ飛んで行った。
窓際の壁ごと星になつたのかもしれない。

「イコ、アラマキが……」

「たぶん、外の空氣を吸いたかったんじゃないかな」

イコが蹴つたのを見ていたんだが……。
いや、何も言つまい。

「そうか……外は雨が降つてゐし 壁、直さないとな

「あ……て、手伝つよ?」

元気なく耳がぺたんと折れて尻尾が垂れた状態のイコが伏し目がち
にもじもじしている可愛さと言つたら……。

アラマキもいい仕事をするものだ。

「私の失言が悪かったんですけど、それでも酷いですよーー。」

「化け物か、キサマ

「村長さんに言われたくないわけで」

蹴られてから間もないのにドアが開き、雨で髪を濡らしたアラマキが帰ってきた。

これから宿の壁はみんなで直そうとしているわけだ。

「龍の羽根とか贅沢すぎるでしょ」……

「大きさ的にこれしか無かつたから仕方ないだろ 文句あるならアラマキが壁やれよ」

「体を張つて雨から守るなんてさすが勇者だね」

「うう、マジ無理 無理ですから 勇者だって無理なこともありますからね？ 私の身体はそんなに伸びないわけで…… 取れます、腕が取れちゃいますからー！ 内臓が、中身が出ちゃいますからー！ やめてくださいー！ 私が死んでも第一、第二の私が現れるでしょひ……だから今は許してくださいーーー！」

「次とその次のアラマキも壁こしてあるから安心じょ」

「なんともいい扱いなのでしょうか……」

勇者の防壁とかカツコいいな、宿屋の壁だけど。
雨が入るのは困るので龍の羽根を使つて直す。

「これってアラマキの部屋の屋根になつてたやつだね うん、これ
なら壊れなくて済みそうだよ」

イコガニニシナガラ硬さを確かめてくる。
壊さないよつにしてほしいのだが嬉しそうなイコを見てると俺も嬉
しくなつてしまつので何も言えない。

「あれあれ、お一人さん なぜか私が壁の一部になつて雨で濡れて
るわけで 早く気付いて助けてください なんで私を触つて壊れな
くて済みそうとか言つてるんですか なんで桃色空間を…… 無視
ですか、そうですか うわあああああああん！！」

王都グラウス

ルア・ルカ国の王都で街全体が防御壁に囲まれている。

中央門から王城へ伸びて いる大通りから外れると迷路のように入り組んだ裏道へと繋がる。

緊急時には魔法障壁が街全体を覆うように展開し、特別な強化が施された城壁は金色に輝く。

名前の由来は使徒の迎撃時に拠点として利用された前衛要塞グラウスの防御壁を城壁に組み込んだことから。

俺は中央に目的があつて訪れた。
それは勇者を探すことだ。

「……」

『ヒノの後継者』を使えばすぐに勇者は見つかるだろ？
問題は金だ。

「金稼ぎしたほうがいいのだろうか」

三人の宿暮らしは大変です。

毎日お金が出ていく。

「……冒険者ギルドで日銭稼ぐとか？ 素材を売るとか？ 賢者の石シリーズを売るとか？ 無理でしょう、どれも大事件にしかならないわけで」

「表出る」

「いや、だつて村長さんだし？ ……ギルド行つたらプチッと殺しそうだし、素材は龍や竜の部位で大混乱、賢者の石はおろか靈薬ですらエーテルの濃さで街中の一般人は死にます まさに無差別テロなわけで」

「俺だつて普通に仕事できるから。
もしかして煽られてんのか。」

「大丈夫だよ、ボクに考えがある」

「さすがイコだな」

「……とても心配です」

「イ」は頼りになる。

アラマキは表出で胸に濡れてる。

「取りに行こ」か ふふ、かなり肥えてる頃だからね

「取りに行こ」だ……

「まあ肥えてるってなんですか……」

「ここと笑ってこるので邪魔しないことでおぐ。一緒に行けばわかるだろ」

「あ、私は行きませんから …… 田舎を離すといわこですけど

「へえ なんか用事でもあるのか

「情報収集ですよ、じょーほーしょーしょー ファンタジーと書つたら酒場に行つて話を聞くのが定番でしょー? ここのお店の店主のじいちゃんに聞いたほうが正確なんですけど、酒場で聞いてみたいわけで」

アラマキの書つフタントジーの定番つて誰が決めてこるのだろうか。

空から落ちる、勇者はバカ、無能、などが定番とか……異世界から無理矢理呼ばれるのに大変だよな、勇者つて。

「付いて行つてやううか？」

「いや、全力で遠慮します 情報を聞きに行つたのに場所が無くなるとか勘弁してください」

「なんでこいつさつきから煽つてくれるんだ。
聞きに行けなくしてくれつてことか。

「なんとこいつ殺氣……つ……死が這い寄つてくる……つ……濃
厚……つ……濃密……つ……ただひたすらな恐怖……つ……」

「うわわわわ……」とかやつてるアラマキの頭を叩く。

ちゅうと涙目になつてゐるが今のはこいつが悪い。

「す、ぐく痛いわけで…… とりあえず私は先に行きます ビール
傘をここに置いておくので使つてくださいねー」

「おひ

「酒場が私を呼んでこむのよ……」とか馬鹿丸出しで出て行ったアラヤキを思考の片隅に追いやつ、イロと話せつと……。

鳥……？

「イロ、なんだそいつ 鳥か？」

「うそ、ボクの同胞つてやつかな ちょっと情報を聞いていたんだ

」

イロの手に乗っているのは小鳥の形をした何か。

田や口は無く、時折水のように波打つ体をしており、内部に核だと思われる小さな球が漂っている。

「ああ、イロの仲間か 持て成さなことな 僕特性のお茶と菓子とかどうだ?」

俺自慢の特製品は金色に輝いているのが特徴だ。
成金趣味っぽいのが欠点かもしれない。

「ちょっと強すぎかな おさつた葉の一部を水出してくれば
十分だよ

「やつか こんな感じでいいか」

取り出した少しだけひがつた薬草を水に浮かべる。

浮かべるだけで水が金色に輝くから不思議なモノである。

「うん、それくらいがちょうどいいね」

「それはよかつた」

皿を取り出して飲みやすこよつて移し替へよつとしたら小鳥もどきが水に潜ってしまった。
えつと……。

「魅力的だったみたいだよ、君の育てた薬草を浮かべた水は

ちょっと驚いたが小鳥もどきが頭だけ出して漫かっている姿は和む。
水を全部取り込んで金色に輝いている姿には言葉が出なくなつた。

「そ、そつか……」

「格がかなり上がったね クラスも上がりそうだよ

「そうなのか?」

ピカッと輝いて『』となくキリッとしている小鳥もさすがクラスアップ直前らしい。

よくわからないが俺の周りを軽快に飛んでいる。

「ふふ、懐かれたみたいだね 仲良くなってくれてうれしいよ

「まあ、悪い気はしないな」

俺の肩に乗ったまま羽根を休めた小鳥もどきを見て、苦笑い。

『歯車の心得』、『螺旋回し』の称号と『自律玩具・偽』のスキル

『魔獣使い』、『鳥使い』のジョブを取得した……また何かが起きたらしい。

「そろそろ行こうか 取りに、ね?」

楽しそうに部屋を出ていくイコを傘を持ってから追いかける。宿屋のドワーフのじいさんに外に行くことを告げて外に出る。

「場所はわかつてゐるのか?」

「うん、まかせてよ」

雨の中、雑踏をイコと歩く。

黒いローブを被つた女がビニール傘に興味を示してこちらを見るが、顔色を蒼くした後に逃げるよつて裏道へといなくなつた。

「普通の傘だよな」

「せうだね 普通のびーーる傘だね」

珍しいけど逃げるようなモノじゃないだらつ。

失礼極まりないやつだ。

「あ、濡れてるよ」

雨でイコが濡れないようにしていたのだが、俺の腕が湿つてこむことに気が付いてぴつたりとくつついてきた。
ちょっと恥ずかしいが腕に感じる柔らかな温もりとかなんとか「う」
褒美。

「耳と尻尾は隠してるので もったいないな」

「ふふ、ごめんね でもこの国は人間が優遇されてるからヒト攫いとかに絡まれたら大変でしょ？」

イコと目が合つたやつは片つ端から石を投げつけたほうがいいかもしれない。

美しさに目が眩んで何をしてかすかわからないからだ。

「優遇されるほど人間が凄いとは思わないんだが」

「ルア・ルカは人間が主導してるからね 隣のエーディルフィアは信徒連つて宗教が力を持つてるし、逆隣りのインシロフは獣人が、タデルは翼人たちが実権を握つてているんだ つまり国の偉い人の種族が関わっているし、人間つて多いからどこの国にも良し悪しどちらも影響があるみたいだよ」

数こそが力つてことだろうか。

イコは凄いのだから獣人のほうが優れていると思うが、そう簡単なことでもないのだろう。

「ここら辺は人が少ないんだな 綺麗というかなんというか……」

「富裕層が暮らしている区画だからね」

金持ちは大きいモノが好きらしい。

庭とか屋敷とか広過ぎて何かあったときに対処できないだろ。

「じゃあ、入るうか」

「入るか」

成金ですって喧伝してるかのよつた悪趣味の豪邸。
門から入らず裏からお邪魔します。

「ここはキンドつて商人の家だよ」

「ああ、村によく来てた」

護衛の冒険者を数人ほど引き連れて薬草を買って行った商人である。
昔は冒険者をしていたらしく魔法も使えるらしい。

「ほら、はした金で薬草を買って行つたでしょ？だから代金の余
剩分を貰いにきたのや」

「ああ、なるほど」

騙しやがつたな、返せってことか。

犬の銅像が吠えながらじやれ付いてきたが腕を軽く噛まれて邪魔だったのでお座りさせる。

「ホントは村でそのまま受け取れば良かつたんだけど、皿みが薄いと来なくなつちゃうからね。しかも村でお金があつても物を高値で買わされて商人に戻すことになるだけだから無駄になつちゃうんだよ。今なら村から持ち帰つた物を高値で売つて財産を溜めこんでいい感じに肥えてると思つんだ」

「言つても素直にもらえるとは思えないが」

遠くで小鳥もどきに犬が腹を見せていたが、小鳥もどきに捕食されていた。

後で小鳥もどきの名前を決めよつ、呼びにへいし。

「押し入つて勝手にもらつだけだよ。君のモノだつたんだから問題ないね。むしろ今まで我慢してたのを褒めて欲しいくらいだね」

「や、そつか」

「イコが詰つのだからいいのだろ？。

俺は勇者のことを盗人って言えないかもしね。

「気にしなくとも投資しただけだと思えばいいよ。餌をあげて肥えさせて回収するってだけだからある意味では家畜みたいなモノさ。」

「イコはいろいろ考てるんだな」

「ふふ、楽しいものだよ」

俺も薬草にエーテルを与えて育てて食べるから同じかもしれない。鳥もどきが犬を取り込んでるのだが大丈夫なのだろうか。

「あの鳥っぽいのに名前は付いてるのか？」

「型番とかなら……名前はないから付けてあげたら喜ぶんじゃないかな」

鳥もどきが家の中から現れた男を悲鳴もあげさせずに取り込んでいる。

さすがに人間は大きさ的に無理だと思ったが案外イケるらしくペロりと飲み込んでしまい、男の姿はなくなつた。

「鳥もどきだしモドキとか……いや、ニクスにしよう」

「うん、いい名前だね」

狼のエリス、龍のシャロン、鳥のニクス。
なんかかわいい気がする。

「……だね 宿でニクスが教えてくれたんだよ」

「やうなのか」

扉がばきつという音を立てたがどこも壊れてないと思う。
ちょっと力を入れてねじ曲がってしまったが、大丈夫だ。

「貯めこんでるね ギフトにいれちゃっていいよ」

「じゃあ、いただきますつと」

影に片っ端から縫い付けている今の気分は宝を見つけて袋に詰め込む盗賊だ。

二クスの飛んで行った方向から数人の悲鳴が聞こえた。

「あ、魔法だね これが詠唱魔法だよ」

「逃げたほうがいいか？」

キンドが詠唱して魔力が放出されている。

詠唱の内容は妖精にお願いしているような言葉なのに、強制してい るような印象を受けた。

「対処法を知っていたほうがいいから受けてみようか 潟巻いてる 魔力が赤いから第一、つまり火属性だね 魔法を使われたら魔法で 相殺するか、障壁を張つて減衰させるかだけど これの威力は大 しことが無いから魔力をちょっとだけ当てるだけで十分だよ やつ てみてごらん」

「なんか怖いな……」

部屋が埋め尽くされるほど大きな火の玉が飛んできた。
威力はショボいらしいので軽く魔力をボツと出してみる。

「ちょっとあつたかくなつた」

「今のが『ファイヤ・ボール』だよ 喰嗟の時はそんな感じで防げ
ばいいからね」

防ぐとぬるい風が通り過ぎるだけだった。

キンドは俺といの顔を見ると青ざめていたがビリしたのだろうか。

「みたいな感じでお金を取りてきたよ」

「なんという…… 手段をもつと詳しく聞くべきでした…… 取つ
てきたといつか『盗つてきた』わけ」

なんだか落ち込んでるアラマキを無視して一クスに薬草を広げる。
帰つてきてからも水、薄めたお茶、お茶、薬草の一部と取り込み続
けていて食欲旺盛でかわいい。

「……その商人は殺してないんですか」

「殺してないよ でもそのうち遊びに行くなと言つたら焦つてたね」

手のひらほどの大きさで鳥形をしているが身体そのものは金色の水
っぽい何かで構成されていて内部には核が漂つてている一クスを眺め
ていた俺は気付いた。

二クスは本物のスライムなのでは、と。

「ギルドマスターでしきう？　憲兵とかが捕まえに来るんじゃないですか？」

「当分は来ないだろうね　ギルドにとつて信頼は活動するうえで最も重要な要素なのにマスターの自分が盗みに入られたなんて汚点を声高々にして言えるわけないよ　名も知れないコソ泥に入られたマスターが運営するギルド、なんて噂が流れたら潰れちゃうからね　それでなくとも薬草、つまり靈薬には黒い噂が絶えないのに万が一にでも所持していることが現場の調査などで情報が洩れて他のギルドにバレたら何が起きるかわからないよ　しかも闇ギルドなんて過激な集団が薬草を売っている根元を狙っているみたいだし　何処に流しているかは知らないけど秘匿は完璧だったね　ボクらはあれの人生を断てる状態だから内密に処理しようと行動するだろうけど、お金は貰つてきたから財で解決はできない　取れる手段は脅すか攫うか、そんな単純なものしか選ばないんじゃないかな　でも、そうなつたら面白いと思つよ……ボクが」

「もうどうにでもなればいいんです……　でもギルドに村の場所がバレたらどうするんですか？」

「森を突破した冒険者はシャロンが出迎えてパクッと食べてくれるよ　手が足りなかつたら昔創つた彼の作品も大盤振る舞いしちゃおうかな　商人は必要だつたから不干渉だつたけどもう要らないからね」

「うわあ、いい笑顔……」

犬や人を溶かして取り込むスライムのニクスは大きさや形が自由に変えられるので鳥や犬、それよりも大きなモノにもなれるのだから凄い。

イコは楽しそうに笑っているが、アラマキの頬が引き攣つっていたが何かあったのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4740w/>

けんむす

2011年10月7日23時02分発行